

# イザベラ・バードの*Unbeaten Tracks in Japan*における 「未踏」の二重の意味

高 畑 美代子

## 要旨：

1878年に日本を訪れたイザベラ・バードの日本旅行記である*Unbeaten Tracks in Japan*には、彼女の旅した地域で見聞した光景や人々の描写の他にキリスト教伝道に関する記載が多い。青森県黒石に到達した時、彼女は旅の途上目にした数え切れない異教徒の民を救えるのかという伝道に関する悩みを書き綴っていた。

しかし、そののちの記述では、この日本旅行の頃は、伝道の問題には関心がなく、可能な限り伝道拠点を避けていたという。本稿ではこの2つの記述の矛盾点を問題として取り上げ、*Unbeaten Tracks in Japan*の記述に照らし合わせ実際はどうであったのかを検討した。

さらにこの旅行記の題名としてつけられ、また本文ではすべて括弧付きで用いられた“unbeaten tracks”＝「未踏路」を“beaten tracks”＝「既踏路」と対照させながら、「括弧付きの“unbeaten Tracks”」としてその意味を考察した。

イザベラ・バードが「未踏路」にあって記した伝道への想いとその行動を検討することにより両者の間には密接な関係があったことがわかった。またこの作業を通して日本旅行記の表題となった“unbeaten tracks”は、「他人<sup>と</sup>の行かない未踏」と「伝道の未踏」の2重の意味を有するということがわかった。

これらのことから、日本においては、『日本奥地紀行』のいわば「民俗学的」なエキゾティックな日本の紹介者としてのイメージが強かったイザベラ像に対して、海外伝道に深い関心を抱くキリスト教徒としてのイザベラ・バードの一面を示すことができたと考える。

キーワード：「未踏」の二重の意味、伝道の未踏、医療伝道、イザベラ・バードが会った人々

## The Double Meaning of “Unbeaten” in *Unbeaten Tracks in Japan* by Isabella L. Bird

Miyoko TAKAHATA

### Abstract：

*Unbeaten Tracks in Japan* is a record of Isabella Bird's travel in Japan in 1878. She described about protestant Mission and Mission Stations in Japan a lot as well spectacle and people that she saw and heard in the regions where she traveled. When she stayed at Kuroishi in Aomori prefecture, she spelled out her solemn queries whether “one Father” makes salvation of the multitudinous of His heathen.

Because, as she accounted for herself, she had not been concerned with the issue of the foreign missions in Japan, she had kept herself away from the missionary stations as far as possible. I treated the inconsistency implied in her two kinds of descriptions, and I verified the reality by means of the examination of what is written in *Unbeaten Tracks in Japan*, and for that purpose I carried out examining her description on visiting mission stations and people whom she met there.

The phrase “Unbeaten Tracks”, which was the subject matter of her book, also all of them, whenever appeared, were used in quotation marks. After analyzed the meanings of “Unbeaten Tracks” in quotation marks, I found that there being a contrast between “unbeaten tracks” and “beaten tracks”.

It turned out that between “unbeaten tracks” and “beaten tracks” there is a close relation through the situation which was revealed by my inquiring into her thought about foreign missions and her range of operations in Japan. As a result “Unbeaten” which was the subject matter of her travels in Japan has a double meaning which connotes, on the one hand, that there are few Europeans visiting on *unbeaten tracks* and, on the other, that never having been trodden by Christian missionaries on unbeaten tracks.

The above is to indicate her new image as an enthusiastic Christian Isabella Bird, though her image has been rather one of a curious “ethnological” traveler in the Northern Part of Japan.

**Key Words** : double meaning of “*unbeaten*”, *unbeaten tracks* of Christian missionaries, medical missionary, people whom Isabella Bird met.

## はじめに

19世紀半ば、西洋諸国の前にアジアの東の果てにある日本という国の蓋が開き215年ぶりにその姿を現わした。この開かれた箱からはモノとヒト、そしてあらゆる形状の情報が飛び出していった。逆の流れはもっと勢いよく日本になだれこんできた。西洋と日本は互いに一般の人々の間にその姿を現しつつあった。中央政府のみならず地方統治機関もさまざまな分野のお雇い外人を招聘した。また日本の開国を待ち、長崎・中国に待機していたキリスト教の宣教師たちや、交易に携わる人々もやってきた。そしてものめずらしい国を覗きたい旅人たち、その中には、江戸末を探訪した(1865) シュリーマンもいた<sup>1)</sup>。そうした状況の中、明治維新前後の日本では、「日本から観た西洋」と「西洋から観た日本」のそれぞれの研究が生まれた。これらには体験知あるいは観察知の側面と既出情報の整理集成の側面がみられ、西洋諸国においてこの双方により構成された著書・研究は、彼らの視線による日本の姿を人々に示した。

1878年に日本に来た英国の女性旅行家イザベラ・バード(ミセス・ビショップ)もそのような日本の体験の観察者であり、情報発信者でもあった。また、彼女は同時に当時の英訳された活字情報の精力的利用者でもあった。彼女はその著書(1878年の日本旅行を記した*Unbeaten Tracks in Japan*)で、英国の人々に近代システム構築当初の日本を紹介したが、それから130年の時の経過は彼女を、既にわれわれの手元から消えた或いは消えつつある過去の日本の語り部であるかのように見せている。この観点からは彼女の旅を辿った宮本常一<sup>2)</sup>と、加納孝代<sup>3)</sup>の研究がある。

金坂清則<sup>4)</sup>は多岐にわたるその精緻な研究により彼女の生涯および旅の全容を示して、その旅の意義を複眼的に見ることを提案しているが、キリスト教の視点からの解明もそのひとつである。この点に関して武藤信義<sup>5)</sup>は彼女の宗教観や我が国の宗教の実情とその批判、キリスト教の伝道活動が*Unbeaten Tracks in Japan*の特色のひとつであると述べている。楠家重敏<sup>6)</sup>はキリスト教布教と医療伝道活動が彼女の生涯における重要なキーワードとなっていると指摘している。このようにイザベラとキリスト教とに関する研究の必要性の指摘は多いが、詳しい研究はまだみられない。また、楠家はレディ・トラベラーとしての彼女の一面に目をむけ、他のレディ・トラベラーとの関わりを紹介して、その歴史の中で再考する必要があると述べている<sup>7)</sup>。

これらを踏まえて、本稿では彼女の日本での訪問の実際をその記述を基に検証し、彼女が*Unbeaten Tracks in Japan*で括弧を付けて記した“unbeaten tracks”の「未踏」の意味を探る。

## 第I章 問題の所在

### 1. *Unbeaten Tracks in Japan* の表題となった「未踏」

イザベラ・バードの日本旅行記である『日本の未踏路——蝦夷の先住民、日光、伊勢訪問を含む奥地旅行記』*Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in The Interior, Including Visits to The Aborigines of Yezo and The Shrines of Nikko and Ise*の初版は、1880年にロンドンのジョン・マレー社から2巻本として出版された。1885年に同社から伊勢神宮訪問を含む関西旅行と覚書を削除して半分以下の分量にした省略版（1巻本）が出された。

日本では、1973年に高梨健吉の翻訳によりこの省略版が『日本奥地紀行』<sup>9)</sup>として出版された。また削除部分は、2002年に楠家重敏・橋本かほる・宮崎路子の翻訳で『バード日本紀行』として刊行された。これにより初版も大部分が日本語で読めるようになったが、これらの訳でも部分的に削除されたところはまだ残っている。

楠家氏がロンドンのジョン・マレー社の倉庫で発見した1879年5月30日付けのイザベラ・バードとジョン・マレー社間の手紙には、*Unbeaten Tracks in Japan*というタイトルの発案者は著者のイザベラではなく、彼女の日本旅行に尽力した駐日英国公使ハリー・パークス卿であったことが記されていたという<sup>9)</sup>。

この本の題名とされた“unbeaten tracks”=「未踏路」は、本文の中では必ずクォテーションマーク付きで用いられている。イザベラの伝記を書いたアンナ・ストッダート<sup>10)</sup>がその冒頭で19世紀の著名な6人のレディ・トラベラー<sup>11)</sup>のひとりとして彼女（Mrs. Bishop）を紹介していることから、彼女が「他人の未だ行かない地」を目指したのは当然であったともいえる。また楠家は「女性旅行家としてのバードが一般読者に知らせて「商品」にしたかったのは未開で素朴な人びとだった。アイヌはそのために打ってつけの素材だった。」<sup>12)</sup>という。そうであろうと思う一方で、本当にそれだけだろうか、彼女にとっての括弧付きの「未踏」はどのような意味を持つものであったのだろうかという疑問が残る。そこで、第1に、初版（1880）に基づき“unbeaten tracks”と“beaten tracks”という2つの言葉に着目して、第II章でその記述箇所をリストアップして、イザベラ・バードの括弧付きの「未踏」について考察をする。

### 2. イザベラ・バードの記述に基づく問題提起

第2に、未踏の地を騎馬旅行しているイザベラの心に湧き上がってきたと記されている彼女の疑問と、その後の記述をとりあげて、その矛盾点を指摘して問題提起とする。

以下のような疑問を彼女は抱いていた。この部分は省略版では削除され、邦訳はないので私訳を示す。原文の斜字体は傍点とした。文中で引用された聖書の言葉には、[訳注：1]～[17]を付け、その出典箇所を訳文末に記した。

#### ① 青森県黒石部分の聖書の言葉で綴られた記述——その私訳

Isabella L Bird *Unbeaten Tracks in Japan* I (John Murray, 1880) LETTER XXXVI p. 3

『日本奥地紀行』（第三十一信）p.328の最後に続く部分。

たくさんの厳粛な疑問がこの異教徒<sup>13)</sup>の土地では湧き上がってくる。こうした疑問は、国もとては起きないか、あるいは、起きたとしても遥かにか弱い力でしか湧き上がってこないのだが、私が独りで馬に跨っているとき、それらは絶えず浮かび上がってくる。「ただひとりの父なる神<sup>23)</sup>」は、何百万というご自分の異教徒の民の子の救済を、けちで欲深く、ぐずで利己的な——人間と金銭の双方に関して利己的で欲深さをもつ——教会の遅鈍さに頼るようになされたのだろうか。われらの主

なる救い主キリストは、永遠の滅亡——人間の知覚を超えるひとつの恐怖——を「少なくムチ打たれる<sup>3)</sup>」という寛大な御ことばによって意味させたのだろうか。カルバリ山におけるキリストの磔死は神により選ばれし少数のもののための贖い、あるいは和解であったのか<sup>4)</sup>。または「全世界の罪に対するいと完全かつ十分な犠牲、厳粛な捧げもの<sup>5)</sup>」であったのか。彼キリストは選ばれし少数者のための大祭司<sup>6)</sup>なのか、それとも「神の御座の右に着座され<sup>7)</sup>」、彼がそのために死んだ「全世界」のために絶え間なく介入をなさるお方なのか。そして「時が満つると総てのものをひとつに集め<sup>8)</sup>」、その結果「アダムにおいてすべての者が死ぬように、まさにキリストにおいてすべてのものは生かされるのだろうか<sup>9)</sup>」？「異教徒たち」は「キリストの相続者ではないのか<sup>10)</sup>」、また、キリストの贖われた者たちは、「だれも数えることのできない多数者<sup>11)</sup>」——あらゆる異邦人からなる——ではないのか？だれでもこれらの人々の間で生活して、彼らの素朴な徳と素朴な悪徳や、農民の着る蓑の下で脈打つ心がいかに優しいかを学んだならば、このような、あるいは、多くの似たような疑問が、湧き上がってくるにちがいない。これら3,400万人のうちにキリストの声を聞いたことのある人々はほとんどなく、そしてその少数者も、ほとんどの戒律が、キリストに従う者としての生活の中で、系統的に破られていることを実感すれば、このような疑問はおのずと萌してくるにちがいない。

全世界の裁き主<sup>12)</sup>は正義を執り行うのではないのか？我々の兄弟たちは、彼らも「また神の子<sup>13)</sup>」だというのに、信頼に値しないのか？神の無限のあわれみ、神の慈しみは限りがなく、「ご自分の御子なるイエスの命を惜しむことなく、私たちすべてのために遣わされた<sup>14)</sup>」のだ。彼らは我々の無知にふさわしく、「いくばくかのムチ打ち<sup>15)</sup>」の業がくだされる時には、悪から救われるという望みに救いを求めて、恐れおののきすがりつく。このとき、すべてのさ迷う子どもたちと共に「わが父の多くの住みかがある家<sup>16)</sup>」に集うのだろうか？これらの言葉は主題からそれているかもしれませんが、しかし、このような疑問が毎日、毎時間、いやおうなしに沸き上がってくるのです<sup>原注1)</sup>。

#### LLB

原注1：私は、これらの文が手紙に書かれたままにしておきます。しかし、これらが宣教の仕事に反対している、あるいは宣教の必要性を疑って書かれたと思われるといけないので、新潟のミッションに関する章で説明をしたように、われらが主の福音の宣教に関わる者への主の最後の言葉<sup>17)</sup>は、世界の果てまで、主に従う者のすべての上に、拘束力を持っていること、また異教徒の究極の宿命についての望みと思わくは、教会の積極的な義務に関して、まったくいかなる種類の、実際いかなる実質的な関わりをも持っていない、という信念を再び繰り返して言うておきます。

[訳注]<sup>13)</sup> 1) コリント14-21。 2) マタイ23-9。 3) ルカ12-48。 4) ローマ5-8～12、コリント5-14。 5) Lord's Supper or Holy Communion (主の晩餐ないし、聖餐の式次第)、ヘブライ9-26。 6) ヘブライ8-11、9-11～15。 7) マルコ16-19。 8) エフェソ1-10。 9) コリント(一)15-22。 10) J・N・Daby (1800-82) による詩篇2-8の解説、エフェソ1-10。 11) ヨハネの黙示録7-9。 12) 創世記18-25。 13) ヨハネ3-1～2。 14) ローマ8-32。 15) ルカ12-48。 16) ヨハネ14-2。 17) マルコ16-15、マタイ28-19。

これはイザベラ・バードが目指した津軽海峡<sup>ツガル ストレイト</sup>を目前にして書いた本州からの最後の手紙(第36信)、混浴の温泉の記述に続く部分である。彼女は「未踏の地」を旅行しながらこのような伝道への想いを持っていたというのだろうか。

しかし、他方では、彼女は以下のようにも述べている。

② イザベラの伝道の問題に関心がなかったという約20年後の記述

Mrs. J. F. Bishop (Isabella L Bird)、*The Yangtze Valley and Beyond: An Account of Journeys in China*『揚子江を越えて－中国紀行』John Murray, 1899、(Ganesha Publishing p.523)

[合わせて] 八年に及ぶアジアの旅の最初[一八七八年の日本の旅]の頃は、この主題にはほとんど、あるいは全く関心がなかった。伝道会や宣教師を鼻であしらうのを楽しんでいたふしさえある。

(金坂清則訳『中国奥地紀行』2、p.328、2002年)

この①と②は相反する記述である。前者では繰り返し伝道への疑問が湧いてきたと言い、後者では伝道に興味がなく、むしろ避けていたと言う。この記述の矛盾点についての考察は第三章で行う。

## 第Ⅱ章 「未踏の地」とキリスト教徒イザベラ・バード

### 1. 日本旅行にいたるまでのイザベラの略歴

ここで日本旅行に至るまでの彼女の来歴をアンナ・ストッダートの『イザベラ・バードの生涯』<sup>14)</sup>にみてみよう。イザベラは1831年にヨークシャーで生まれた。聖職者であった彼女の父は、生後3ヶ月の彼女に洗礼を授けた。彼女の母もまた牧師の娘であり、日曜学校のクラスを受け持っていた。彼女はその誕生からきわめてキリスト教的環境の中に育まれた。彼女の父はインドで弁護士をしていたが、そこで先妻と息子を病で亡くしていた。彼はイザベラを息子の身代わりでもあるかのように、自分の助手として、或いは後継者として育てた。彼女が3歳の時、妹ヘンリエッタが生まれた。イザベラの著作のもとになった書簡は、この妹に宛てて書かれたものである。

16歳の頃、『自由貿易対保護主義』(*Free Trade versus Protection*, Huntingdon, 1849)という論文を書き私的回覧用に印刷されていることからみても、生涯続いた貿易や統治諸制度に対する関心は、非常に早くからあったとすることができる。これらに関する記述が常に彼女の多くの著述の一部を占めていることも見逃せないことである。また彼女は*Sunday Magazine*に「ラテン語の賛美歌(The Latin Hymns of the Church)」(Vol. May 1, June 1, 1865)、「エリザベス時代の英国賛美歌(The English Hymns of the Elizabethan Era)」(1866)を発表している<sup>15)</sup>。

1870年代に入り、健康がすぐれない彼女に主治医は旅行を勧め、彼女はオーストラリア、ハワイ、ロッキー山脈、スイスへと旅行した。日本への旅行も医師の「旅行しなさい」という処方箋によるものであった。1877年は医療伝道のための「国立リビングストーン記念事業」の活動に忙しく(本稿p.23)それが終わってから翌年2月に日本旅行の準備にとりかかった。つまり彼女は日本旅行の直前まで教会活動に携わっていたことになる。しかし、彼女は第1章-2の「問題提起 ②」で示したようにこの主題(伝道)には、この頃はまったく関心がなかったというのである。

ここまでがイザベラ・バードの日本旅行以前の生活である。彼女は日本旅行を含む第1回アジア旅行から帰国するとその旅行記(*Unbeaten Tracks in Japan*)の執筆に取り掛かった。その筆を置いた直後の1880年6月に、妹ヘンリエッタは腸チフスで亡くなったが、出版はそれから間もない10月だった。1881年に彼女は、日本旅行以前から婚約中であった<sup>16)</sup>姉妹の友人で、妹の主治医でもあったジョン・ビショップ博士と結婚し、ミセス・ビショップとして活動する。すなわち、*Unbeaten Tracks in Japan*はイザベラ・バードとして出版した最後の著書である。

### 2. *Unbeaten Tracks in Japan*における括弧付きの「未踏」と「既踏」

*Unbeaten Tracks in Japan*では、“unbeaten tracks”=「未踏路」と“beaten tracks”=「既踏

路」<sup>17)</sup>は括弧付きで記されている。また、彼女の他の旅行記にもunbeaten tracksとbeaten tracksという言葉は出てくる。そこでこれら2つの言葉の用いられ方を「日本旅行以前に書かれた旅行記」と「日本の旅行記 (Unbeaten Tracks in Japan)」に分けて検討する。

### (1) 日本旅行以前の旅行記におけるbeatenとunbeaten

イザベラ・バードの他の紀行では、beaten (既踏) とunbeaten (未踏) はどのように記されていたのだろうか。ここではUnbeaten Tracks in Japan 以前に出版された旅行記を取り上げる。ただし、下記 (e) のマレー半島の旅行記だけは、それ以後の出版であるが、日本旅行の帰路にあたり、Unbeaten Tracks in Japan との連続性があるのでこれも含めた。

イザベラ・バードの日本訪問までに出版された旅行記

- |  |                   |
|--|-------------------|
| (a) <i>The Englishwoman in America</i> , John Murray, (1856.1)               | 『イギリス女性のアメリカ紀行』   |
| (b) <i>The Hawaiian Archipelago</i> , John Murray, (1875.2)                  | 『イザベラ・バードのハワイ紀行』  |
| (c) <i>A Lady's life in the Rocky Mountains</i> , John Murray, (1879.10)     | 『ロッキー山脈紀行』        |
| (d) <i>Unbeaten Tracks in Japan</i> , John Murray, (1880.10)                 | 『日本奥地紀行』『バード日本紀行』 |
| (e) <i>The Golden Chersonese and the Way Thither</i> , John Murray, (1883.4) | 『黄金のマレー半島』        |

注：日本語 (b) (c) (d) は邦訳書の題、(a) (e) は邦訳なし。

(a) 『イギリス女性のアメリカ紀行』は、イザベラの最初の外国旅行 (1854年6～12月) の紀行文であり、彼女が25歳の時出版された最初の単行本でもある。その冒頭に、‘beaten tracks’ [既踏路] は ‘avoiding the beaten tracks’ [他人の行くところを避けて] という表現で登場する。

私が見たり聞いたりしたことを正確に描き出すように努力し、出来る限り踏みならされた道を避け、主にその地域のことについて詳しく論じるつもりです。それが私の友人たちにとって最も興味あることだと分かっているからです。<sup>18)</sup>

(傍点引用者)

ここに示された「見聞に基づいた正確な描写」と「未踏路=他人の行かないところ」はその後のイザベラの生涯を通しての旅とその紀行の基本姿勢となったものであるが、彼女はその旅をはじめた第一歩からこの2つを掲げていた。

彼女は1857年に再びアメリカ、カナダを訪れているが、この時は、彼女の父、エドワード牧師<sup>19)</sup>によって派遣されたもので、アメリカの信仰復興運動<sup>20)</sup>の調査が目的であった。帰国後彼女は、『アメリカにおける信仰復興運動 (The Revival in America)』(James Nibet and Co, 1858)、『アメリカ合衆国における宗教の諸相 (The Aspects of Religion in the United States of America)』(Sampson Low, 1859)の2冊を刊行し、続いてクォタリー・レビューにReligion Revivals (1860)と信仰復興に関する論文をつぎつぎ発表した<sup>21)</sup>。

アメリカ・カナダ旅行からはじまったその後の彼女の永い旅の出発点においてすでに、「未踏」と「伝道」が共にあったのである。

次の (b) サンドイッチ諸島 (ハワイ) 紀行には「未踏」という単語を発見できなかった<sup>22)</sup>。このハワイ旅行と連続しているのがロッキー山脈の旅行である。この一連の旅行は、彼女が41歳の時であり、アメリカ紀行にみられた「踏みならされた道を外れて」という彼女の意思は徐々に明確になりつつあった。

以下は (c) 『ロッキー山脈紀行』の中の「未踏」に関する叙述の部分である。

とにかくここまで魅了されてしまうと、エステズ・パーク<sup>23)</sup>は私のものという感情に捕らえられてしまいます。人跡未踏で誰の土地でもないこの土地は、それに対する愛情と正しい認識を持っているという点からしても私のものであり、比類のない日の出と日没、神々しい余光、輝く真昼、荒れ狂う嵐、素晴らしい極光、荘厳な山と森、溪谷と湖と川、それらすべてが私の記憶に焼きついているのですから完璧に私のものです。さらにまた、イギリスのオークの下にいる黄褐色の鹿と同じくらい安全で、早朝松の下でたわむれたり闘ったりしている堂々としたワピチも、狩猟人が抱く感覚とは別の感覚で私のものです。足が速くて優雅なオグロジカ、巨大な岩の頂上に青い空を背景にして典雅な頭を上げている見事なリーダーに率いられたオオツノジカの群れ、夜行性でギヤーギヤー鳴き、忍び足に歩くピユーマ、巨大な灰色熊、美しいスカンク、いつもダムを作って水をせき止め流れを変え、綿の若木を切り倒し、繁栄と勤勉の見本になっている用心深いビーバー、がつかつかして臆病な狼、コヨーテと山猫、ミンク、テン、猫、兎、狐リス、縞リスなどの小動物、驚からカンムリアオカケスにいたるまで皆私のものです。(傍点引用者)

(小野崎晶裕訳『ロッキー山脈紀行』pp.146-147、*A Lady's Life in the Rocky Mountains*, John Murray, 1879.)

この時点では、彼女の未踏に対する思いは緒についたばかりのところである。純粹に人跡未踏の自然と向き合って抱いたこの感情は、のちのアジア旅行における括弧つきの「未踏」の内容とはかなり異なったものであるが、この叙述から彼女がいかにして「未踏の大地」と切り結んでいくかを知ることができる。ここで記されている彼女にとっての未踏なるものの構成は以下のように表すことができるだろう。

- 第1段階「人跡未踏で誰の土地でもない」……誰にも所有されない自然
- 第2段階「それに対する愛情と正しい認識」……それを所有することの条件
- 第3段階「それらすべてが私の記憶に焼きついている」……所有の完成
- 第4段階「狩猟人が抱く感覚とは別の感覚で私のもの」……自然そのものへの熱い想いと認識
- 第5段階「～にいたるまで皆私のものです」……自然そのものと一体化した自己、自然の生命のすべてを受け入れる

第1段階の「誰の土地でもない」の表現は文字通りの所有権とは考えられず、彼女以外に他の誰もが得ることのできない「感覚の所有」である。それを得るためには、「愛情と正しい認識」が要求され、それを持ったがゆえに記憶に焼きつき、第4段階から第5段階への移行にあたっては、「他と異なる感覚で私のもの」から「皆私のもの」となって彼女の「未踏」は自然と一体化する。

彼女が未踏の地の理解に不可欠と考える「愛情と正しい認識」は、彼女のどの旅行記にも繰り返される「見たまま」、「正確な記述」とそのために「現地の人々の中にあること」という言葉と行動として（あるいはそうありたいという願望として）顕われることになる。

「未踏の地」に立った時、はじめて、彼女に「未踏への欲望」が芽生えた。「欲望は対象が在るときにのみ生じる。対象は欲望があるときにのみ存在する。欲望と対象は双子であり、どちらか一方がよりほんの少しでも先に誕生するということはない」というキルケゴールの言葉が示すように、イザベラの「未踏への欲望」は「未踏という対象」と双子の関係にあり、「欲望」と「対象」の相互性の上に成り立っている。この自分だけのという「未踏の所有」に対する欲望こそがのちに彼女を「生涯続いた旅」へと駆り立てた原動力のひとつと考えられるが、ここではまだ、彼女にとって「未踏」は彼女自身がはじめて接した大自然の感覚そのものであり、自分だけが知ることのできる自然との一体化であった。この未踏の地への憧れは、彼女の子どものころからのアジアという神秘的国の大陸への憧れと結びついて、*Unbeaten Tracks in Japan*の旅へと向かったのである。

(e) 『黄金のマレー半島』には、「そこは私の子どもの頃からの夢であった神秘的なアジアの岸だった」(e) p.29) と、彼女が子どものころからアジアへの憧れを持っていたことが記されている。

また、この旅行は彼女の未婚時代すなわちイザベラ・バードとしての最後の旅でもあったので、彼女の本の中でこれだけがIsabella Bird (Mrs. Bishop) と出版時点の姓が括弧付で併記されている。これ以後の彼女の著作はMrs. BishopまたはMrs. Bishop (Isabella Bird) として出版されている。

(2) *Unbeaten Tracks in Japan*における“unbeaten tracks”「未踏路」と“beaten tracks”「既踏路」

*Unbeaten Tracks in Japan*の中で“unbeaten tracks”という言葉をもとにするのは、彼女がいよいよ奥地の旅に出た第一報である粕壁からの手紙(6月10日)の冒頭の「日付を見ればわかるように、私は長い旅行を始めた。しかしまだ「未踏の地」には至っていない(though not upon the “unbeaten tracks”）」というところだ。彼女はここで自分の向かう先は「未踏路」であると宣言しているのである。

新潟から山形県に入った彼女は、市野々で「有名な山形市」を目指すことに決め、「人のよく通らぬ道筋を進みたい」(表1-⑤)と宿の主人や駅係、通りすがりの人に尋ねている。このような直接的表現(“unbeaten tracks”)で、奥地を目指すという彼女の意思を示した文章は意外なほど少ないが、彼女はこの言葉をすべて括弧で囲み特別の意味をもたせて書いている。

明らかに“unbeaten tracks”を掲げているのは、欄外の柱(はしら)として記され、コンテンツにも表示されている第40信である。この信で彼女はアイヌと出会い、次の第41信から46信までは、アイヌの人々と共にした生活や彼女が目にしたアイヌが叙述される。そこは、彼女にとって真の「未踏の地」ともいうべきところであって、古い日本があるはずであった。彼女の北日本の先住民であるアイヌの記述は故国で高く評価された。ハリー・パークス卿はこの部分を念頭において“*Unbeaten Tracks in Japan*”をイザベラの日本旅行記のタイトルとすることを提案したと考えられる。

また“beaten tracks”「既踏路」は“unbeaten tracks”「未踏路」と対極にある言葉であるが、off the “beaten tracks”(人の行かないところ)のように「未踏」と同じ意味を持たせた用法が“unbeaten tracks”とほぼ同数あった。そこで「未踏路」と「既踏路」が用いられた箇所(表1)をもとにイザベラ・バードの括弧付きの「未踏」について検討する。

表1. *Unbeaten Tracks in Japan* に記された “unbeaten tracks” と “beaten tracks”

原著IとIIの頁はGANESHA PUBLISHING (1997)。邦訳頁は高梨健吉訳『日本奥地紀行』平凡社(2000)

記載場所/日付	記載文と頁
①Preface	
a.	From Nikko Northwards my route was altogether off the beaten track, and had never been traveled in its entirety by any European. (I p. vii, 邦p. 18)
b.	The “beaten tracks” with the exception of Nikko, have dismissed in a few sentences, (I p. viii, 邦p. 18)
②Yedo, June 7.	naming the <u>beaten tracks</u> of countless tourists (I p. 47, 邦p. 45)
③Kasukabe, June 10.	though not upon “unbeaten tracks” which I hope to take (I p. 79, 邦p. 67)
④Irimichi, June 23.	My journey will now be entirely over “unbeaten tracks” (I p.146, 邦p.136)
⑤Ichinono, July 12.	“unbeaten tracks” that I wish to take (I p.249, 邦p.209)
⑥Kubota, July 24.	“unbeaten tracks” which I prefer (I p.313, 邦p.265)
⑦Ginsainoma, Aug 17.	I am yet off the “beaten tracks” (II p. 27, 邦p.346)
⑧Saruft, Aug 14.	I was happy when I left the “beaten tracks” to Satsuporo (II p. 41, 邦p.364)



⑨Yamada, Nov 10.	she felt a good deal of trepidation in starting upon the “unbeaten track” (II p.258)
⑩Yedo, Dec 18.	out of the <u>beaten tracks</u> that it was only after prolonged inquiry that its whereabouts was ascertained. (II p.307, 邦p.509)

注：下線部は引用者（括弧なしの未踏部分）。⑦ジュンサイヌマ 蓴菜沼、⑧サルフツ 佐留太。

①の2つの文は「はしがき」に記されたもので、前者は「日光から北の方の全行程を踏破したヨーロッパ人は一人もいなかった」とこの旅行の意義を述べ、後者では西洋人が行くところについては詳しくは述べなかったと、旅行記の主とするところは“unbeaten tracks”にあることを示唆している。ここではじめて前者の文に続けて「西洋人のよく出かける」ところという意味をもった括弧つきの“beaten tracks”が出てくる。

③⑤では、「私の行きたいと思っている」と未踏を目指す彼女の意思と望みが示されている。③は「未踏の地には至っていない」と東京を出発してまもない粕壁で記されている。

④で彼女がいよいよ旅は「未踏の地」だけになると言っているのは、日光を出て会津西街道を進み栃木—福島の間境へ向かおうとしている時である。イザベラが「私は田島へ行く」とブラントン<sup>24)</sup>による地図の北へ向かう直線へその進路を定めた時、彼女はその先が未踏の地なのだ、そしてそこには彼女の見たい「古い日本 “Old Japan”」があると確信していた。「未踏の地」と「古い日本」は彼女にとってセットをなしており、両者とも括弧で示さなければならない旅の象徴であったと考えてよいだろう。またここで、Oldは大文字で記されていて、彼女にとってそれは、西洋との混交のない真の日本を意味するものだったが、それは人々の暮らしのみならずその基盤となる精神ないしは信仰の古さ、彼女が問題にする迷信に浸かった北部日本の強調でもあった。

⑥は本州の旅も終わり近くなった久保田（秋田）からの信で、「当然ながら彼（伊藤）は大都會が好きで、私が好きな「未踏の地」を選ぼうとするのを避けさせようとする。」と述べられ、ここではじめて彼女の好きという気持ちが示されている。

この文は「大都會の好きな」通訳兼召使の伊藤と「未踏が好きな」イザベラは、近代化を進める日本のしかも通訳をしている若者と近代産業社会を実現させた英国の女性という対比になっている。それは同時に古い日本を脱ぎ捨てたい当時の若い日本人と古い珍しい日本に接しながら、産業革命後の近代化の中で英国が失ったものを故国に伝えようとする中年の西洋人という対比でもある。彼女の「未踏」に向けられた眼差しは、近代と西洋という時空からのものであり、その視線の先には幕藩体制下で培われた日本独自の文化の破壊と新しい時代の創造があることを想起させる。

⑦は、いよいよ彼女が真の日本があると信じてやってきた蝦夷での記述である。イザベラが上陸した函館は、もはや蝦夷ではなく開港場で賑わう北海道であった。彼女は函館を出てアイヌの人々の生活する平取に向かう。「未踏」が手に届きそうになったその途上のジュンサイヌマ 蓴菜沼（小沼）でも「まだ未踏の地ではない」と言っている。

⑧は湧別（勇払）から佐留太まで来てやっと「(札幌へ向かう)よく人の往来する道から離れて嬉しかった」とようやく本物の「未踏の地」にきたという気持ちを表している。先にも記したように（本稿p.10）この第40信（『日本奥地紀行』第35信）の頁の上には“unbeaten track”と記されており、ここが彼女の目指した「未踏の地」だとわかる。

⑨は伊勢神宮を訪ねての旅行で記されたもので、①から⑧までが示す地域とは異なる。旅の同伴者は伊藤に代わって、キューリック夫人である。奈良見物を終えこれから「三輪」へ向かうところである。ここで、sheはキューリック夫人であり、彼女は「未踏の地」から伊勢へ向かっての旅をはじめることによって不安を感じているところである。彼女たちにとって「はじめての地」であるこの地の旅で“unbeaten track”が用いられたのは、この信では「伊藤がいれば」「伊藤がいてくれたら」と何度か記されており、イザベラにとって真の「未踏の地」であった日本北部の旅がその背後に潜

んでいる表現である。

②と⑩は括弧なしのbeaten tracks, つまり踏みならされた道である。両者はいずれも東京で記されている。②は、数え切れない旅行者が踏みならしたと名指しされるべき「東海道、中山道、京都、日光」で、これらがイザベラのもとに召使い兼通訳志願でやって来た者たちが旅行したことがあると言った地域でもある。彼女の目指す「北部日本や北海道」は彼ら志願者にとってもやはり未踏の地だったのである。

⑩は「既踏路」つまり「東京の街中」から外れた「名所」というところのものであるが、それは桐ヶ谷の火葬場である。火葬場は文明の目に見える差異のひとつとして見聞の価値のあるところであったようで、1872（明治4）年にはグリフィスが彼の任地である福井で火葬場を訪ねているし、モースも1882年に千住の火葬場を訪ねて記述を残している。この括弧なしのbeaten tracks（②⑩）は外国人も日本人もよく出かける既踏であった。beaten tracksの他の用法はそこから外れていくという使い方である。つまり、彼女にとって真に「未踏路」と言うべき地は「既踏路」と切り離された、まさにクォーターション・マークつきの“unbeaten tracks”でなければならないのである。

表1の中でbeaten tracks（①-a、②、⑩）が括弧なしで記されている。他方、“unbeaten tracks”はすべて括弧が付けられている。また彼女が奥地旅行に旅立ったのちは両者共にすべて括弧付きで用いられている。

また、ロッキー山脈の旅行記と日本の旅行記の「未踏」では、その捉え方が明らかに変化している。日本旅行記以前の未踏は、大自然と結びついているが、日本の東北内陸部・北海道の「未踏」には主要街道ではない道筋と、そこに生きる未開な人々という文化的未踏、すなわち未西洋化の意味が現れる。それは、自然の中で体感し、獲得した前者の未踏とは異なったものである。つまり彼女の旅の視線が自然からより人間へと向けられてきたと考えられるのである。

以上、彼女自身が記した「未踏路」という言葉を辿り、彼女にとっての「未踏」を見てきた。日本の東北・北海道旅行では、内陸または奥地という意味のinteriorという言葉も使われ、“unbeaten tracks”とはほぼ同一の意味をもつが、内陸部の村々の近代化が遅れていたことに関係する。彼女にとっての「踏みならされた道」は海岸線に発達した交易の街であり、ヒトとモノとが行き交う場所にあった。開港場の多国籍の人と建築様式の混在する街を彼女は「混血の街（hybrid cities：横浜を指して用いた言葉）」と言う。ここでハイブリッドは西洋文明による日本文明の汚染を意味して、この2つの異質な文明の混交による構築物は彼女には、醜さと感じられ、それは横浜の洋風建築に対する「倉庫のように素性の知れない卑しい建物の塊」<sup>25)</sup>という評価にも表れている。

未踏はその対極に位置し、ヒト・モノの交流が少なく、従ってその地の文化が保たれているところである。それこそがイザベラの好きな日本なのだと彼女自身が言っているのである。そこは外国婦人など目にしたことのない人々の土地であり、彼女の本の読者である西洋人にとっても新しい情報に満ちた地でもあったのである。開港場における交易は土地の繁栄をもたらすが、その一方で古来の文化を変化させることを彼女は理解し、その変化の結果を予測して、彼女は地方であっても地域から外に開かれた海岸線を避け内陸の路を選択したと考えられる。この点において、彼女はまさに未踏の地を目指すレディ・トラベラーなのである。

初版から20年経って出された新版（1900年）に加えられた彼女の序文の最後は次のように締めくくられている。

（日本の）地方においては、この4年間に私が目にした例から判断すると、交通施設の増加、高等教育、新聞や人びとの生活の変化は非常にわずかなものなので、私は私の旅行談をもう一度、変更なしで出版し紹介しようと思います。それは、「踏みならされた道」から脇に逸れたところにある現在の日本の非常に公正な姿を提供できると信じているからです。（Bishop (Bird), Isabella Lucy, *Unbeaten Tracks in Japan*, George News, 1900, viii)

ここにも彼女の「移り変わる都会」と「保存され変化しない地方」への眼差しが表れている。すなわちイザベラ・バードの括弧付きの「未踏路」は、彼女が「真の日本」というところのもの、西洋文明に汚染されていない「混血<sup>ハイブリッド</sup>でない日本」を意味していると考えられる。

### 第三章 イザベラのキリスト教海外伝道・宣教師に対する記述

次に、第I章-2の「イザベラ・バードの記述に基づく問題提起」(本稿pp.5-6)について検証を進める。「未踏の地」が好きで、それを旅程としたイザベラ・バードは、他方その途上で、繰り返し湧き上がる「これら異教の民を救えるのか」という「厳粛な疑問」に対峙していた。しかしそれにもかかわらず、彼女ののちの記述や講演では、「当時は伝道活動には無関心であった」と言っている。彼女自身の記述にそれをみてみよう。

1893年11月1日ロンドンのエクセターホールでの講演記録

ここでの私の証言は、伝道活動の一端をほんのわずかであれ担った伝道活動者としての証言ではありません。一旅行家としての証言、さまざまな伝道会<sup>ミッション</sup>に帰依してきた一旅行家としての証言です。私は宣教師の成功を見ることによってではなく、四年半に及ぶアジアの旅を通して非キリスト教世界の絶望的な局面を見ることによって、伝道会に帰依するようになったのです。以前の私には伝道会にまったく無関心で、伝道拠点を訪問せずむしろ避けようとする時期がありました。けれども、非キリスト教諸国民の必要としているものが、あまりにも膨大でかつ急を要しているものであることを目にする中で、これらの人々をキリストに帰依するように仕向ける仕事に喜んで尽くそう、この仕事こそは神が私にお与えになった仕事であるという考えに変わったのです。(傍点引用者)

(金坂清則編訳『イザベラ・バード極東の旅2』平凡社、2005、p.128)

ここに記された「伝道に無関心で、むしろ伝道拠点を避けようとした時期」がUnbeaten Tracks in Japanの日本旅行とその前後であることは、次の記述からわかる。

The Yangtze Valley and Beyond: An Account of Journeys in China『揚子江を越えて-中国紀行』(1899)より

この問題(伝道)について自分の考えを敢えていえば、私は外国での伝道活動に特に熱心というわけではないものの、「すべての国にキリスト教を教えること」が義務であり、希望への道であると心から信じるものである。

[合わせて]八年に及ぶアジアの旅の最初[一八七八年の日本の旅]の頃は、この主題(伝道)にはほとんど、あるいは全く関心がなかった。伝道会や宣教師を鼻であしらうのを楽しんでいたふしさえある。そんな私に、英国とアジアの地域社会で健全な精神を求めて過ごしていることの多い彼らは私が半時間にわたって真面目に調べても、その仕事や方法について何も話してくれなかった。私の方も、旅にあっては、可能な限り伝道会の拠点を避けていた。

(〔〕訳者、傍点引用者)(金坂清則訳『中国奥地紀行』2、p.328、2002)

これら2つの引用文はほとんど同じことを述べている。この中国旅行記を書いた1899年頃には、異教徒へのキリスト教伝道はキリスト教徒としての義務であるという信念を持っていた。しかし、1878年の日本旅行の頃はそうではなかったということになる。

そこで彼女の述べた以下の3点について、Unbeaten Tracks in Japanの記述に基づいて、その実

際はどうかであったのかに限定して検証を進める。

1. キリスト教伝道に関心がなかった
2. 可能な限り伝道の拠点を避けていた
3. 宣教師たちはその仕事や方法について何も話してくれなかった

## 1. キリスト教伝道に関心がなかったのか

### (1) *Unbeaten Tracks in Japan*における伝道に関する記述とその削除

イザベラは、上述のように「伝道活動に関心がなかった」と書いているが、他方では、新潟と神戸・大阪・京都への訪問では、伝道活動への興味から訪問したとも記している。

#### 1) 訪問目的の記述

##### ① 新潟への訪問目的 —— 「新潟伝道に関する覚書」

新潟旅行の主たる目的は、パーム宣教医が行った医療伝道についていくばくかを学ぶことであった<sup>26)</sup>。

##### ② 神戸への訪問目的 —— 「第51信 神戸10月20日」

ここは、アメリカン・ボードの後援による布教活動の本拠地である。どういうわけか神戸というと、開港場というより伝道の中心地として思い浮かぶものだ。私がこの街に来たのは、布教活動の進行状況を垣間見るためであった<sup>27)</sup>。

①で言っているように、実際に新潟では、パーム宣教医とその活動について言及している。これについては、「記述された医療伝道」(本稿p.23)で検討する。

①の神戸の布教活動の状況については次のように記されている。

「(神戸は)キリスト教伝道における評判の良い成功の地」であり、「日本でのキリスト教布教の見込みがある程度測れる土地」である。そこでは「九人の男性宣教師(一人を除いて妻帯者)と、五人の独身女性の宣教師」が活動しており、「三つの説教所と二つの出張所」がある。

この神戸からの第51信は伝道拠点における活動とキリスト教の学校およびキリスト教新聞(七一雑報)の記述で埋められている。神戸を案内したギュリック夫妻はアメリカン・ボードの宣教師であり、「七一雑報」の発行責任者でもある。

また同様に大阪・京都での(アメリカン・ボードの)宣教状況も記されている。これらの地域では、学校教育を通しての伝道に言及し、女子寄宿学校やアメリカ伝道学校を訪ね特に女子教育に関心を寄せていたことがわかる<sup>28)</sup>。続く京都からの第52信は京都の伝道活動の状況と京都カレッジ(同志社)について記されている。

これらはいずれも*Unbeaten Tracks in Japan*の初版(1880)における記述である。初版では、上記の市以外にも各地での伝道活動に関して記していた。しかし、省略版(1885)では、実に多くのキリスト教や日本の宗教に関する記述部分が削除された。*Unbeaten Tracks in Japan* I、II巻(1800)に記されていた内容標示(contents)と省略版を比較すると信仰・宗教に関するものでは以下の項目が削除されている。

#### 2) 宗教に関する内容の削除項目 —— *Unbeaten Tracks in Japan*のcontentsから

##### ① キリスト教に関して

I巻. キリスト教地区、英国国教会、キリスト教伝道、伝道拠点としての新潟、2人の宣教

師、3年にわたる布教の成果、伝道本部、日々の説教、医療伝道、日本における宣教師の苦勞、「永遠の生命」を嫌う日本人、キリスト教の前途を阻む新たな障害、評判の説教師、厳肅な疑問、少ない鞭打ち、揺らぐ希望。

Ⅱ卷、日々の説教、伝道の熱意、女子寄宿学校、聖書教室、初めてのキリスト教新開、伝道学校の欠点、「宣教師の態度」、前もって示された真理、カレッジ、ジューンズ大尉、デービス氏、カリキュラム、哲学塾、討論および学生の質問、完全禁酒、伝道の中心地、日本初のキリスト教牧師、聖書の需要の高まり、キリスト教の展望、キリスト教の集会、医療伝道、キリスト教の行く末、空しい異教。

## ② 日本の宗教や迷信に関して

I卷、<sup>ねほん</sup>涅槃、芝の寺院、大黒信仰、仏教の墓地、巡礼の季節、自然信仰の神社、宗教のあきらかな衰退、御神木、寺町通り、寺の内部、穏やかな仏教、死者の国の判定（えんまさま）、民間に流布している迷信、生霊と幽霊（妖怪）、夢による前兆（正夢）、愛と復讐。

Ⅱ卷、仏教のプロテスタント、仏教寺院、仏教の説法。「英語を話す」お坊さん、西本願寺、門徒宗の祭壇、<sup>ねほん</sup>涅槃、輪廻転生、民主主義者釈迦、英国での信仰に対する僧侶の評価、「伊勢の最も神聖なる神々の神殿」、伊勢神宮の神聖さ、神棚、伊勢のお守り、外宮の樺の木立、神社の境内、神聖な囲み、「最も神聖な場所」、神道の鏡、わびしい神宮、二見様の伝説、二つの社、内宮の社、神道の物悲しさ、お伊勢参りがしたいんです、巡礼者の神社、古代の修道院、神聖でない巡礼地の盛り場、仏教の寺、願掛け、神道の覚書。

これらの項目が示すように、伝道拠点やキリスト教主義の学校へ訪問や言及、伝道師の活動など具体的項目が多かったことがわかる。Unbeaten Tracks in Japanの初版では、そのほとんどの信に、キリスト教、あるいはその伝道についての記述がなされていたのである。彼女は書かなかったのではなく、書いて出版したのちに、後年それらを削除したのだ。また、それと対比する日本の人々の信仰や神社の様子とそれに対する彼女のキリスト教文明に立脚する者としての鋭い評価も記述していた。

普及版では、「覚書（東京、新潟、蝦夷に関する）」がすべて削除され、その結果として彼女のキリスト教精神がむき出しに書かれた諸部分がなくなり、テンポがよく読みやすい珍しい土地の冒険物語となった。当時の日本の奥地であった蝦夷をはじめとして東北の内陸部の生活と、そこに押し寄せてきた明治維新の改革の波を呆然と受けている人々の姿を彼女の読者に垣間見せることになったのである。

しかし、その背後にある両者のあの精神的な差異ないし対比は浮き彫りにされずにかき消されてしまった。すなわち、一方は日本文化の基盤となる「古層」ともいべき俗信や迷信までも含めた日本古来の伝統的な生活と「<sup>いの</sup>禱り」であり、他方は、それに対する西洋の側でのキリスト教精神に基づいた人間の生活と「祈り」のあり方である。前者は汎神論的な古代信仰や神道的伝統であり、かつそれと古くから結合した原始仏教や密教、道教まで混交した、多神教的ともいえる信仰諸形態と民俗が含まれ、これらに対する後者からの視点が消え、この両者の対比の鋭さを欠いたその結果として、普及版は日本の奥地への単なるエキゾティズムに満ちた興味を喚起する旅行記になった。

全国にわたって近代日本システムが構築されつつあるとはいっても、地方の人々に染み付いていた日本の迷信や信仰に拠りどころを持つ人々の生活こそが彼女にとっての「未踏」であったはずであり、それらと彼女自身の西洋のキリスト教精神との葛藤の記述が、明らかに初版本のテーマのひとつをなしていた。

## (2) イザベラ・バードの紀行から見た安息日の意味

イザベラにとって安息日はどのような意味をもっていたのだろうか。彼女は括弧つきで「次の日は安息日であった」“And the next day was the Sabbath”と記しているのである。19世紀の英国は、産業社会へと移行していた。パーミングムやマンチェスターでは産業化の進展と共に購買力のたてた労働者階級に向けて日曜日にも商店を休まないという問題が出ていた。イザベラの父エドワード牧師は安息日厳守主義をとり、彼の任地であったパーミングムのセント・トーマス教会区で、日曜日に店を閉めることを拒んだ商店主たちと対立した<sup>29)</sup>。安息日の問題は、バード家の問題としてあった。日本では、英国国教会に属する初期のクリスチャンは、安息日を守ることが義務付けられ、日曜日休日が定着するまでは「随分困ったという」ことが『聖パウロ教会百年史』(文献36p.19)には記されている。ちょうどイザベラの来た1878年には、モース(Morse, Edward S.)が東京で進化論の講義をはじめ、その講義が日曜日にも開かれたために、単に進化論を教えるという以上の問題となっていた。安息日は西洋人社会でもまた改宗した日本人クリスチャンにとってもリトマス紙のような役割を果たしていた。そのような状況の中でのイザベラの安息日の記述をみてみよう。

### 1) 安息日のある国とない国

日本旅行は、それ以前の彼女の旅行とは「安息日のない国」への旅行という点で明らかな違いがあった。アメリカ・カナダ旅行はもちろん日本へ来る前のハワイの旅にも安息日は存在した。それは以下のようなようであった。

一月二八日 ハワイアン・ホテル

日曜日はとても気持ちのよい日だった。教会の鐘が鳴り、木陰の通りは晴れ着姿の人であふれている。先住民向けの大きな教会としてはカウマカピリ教会と、一般に石の教会と呼ばれるカヴァイアハオ教会の二つがある。後者は堅牢な大建築で、現地のキリスト教徒がサンゴの塊を持ち寄って建てたものだ。……中略……

当然のことだが、現地の人々は本人あるいは父親がキリスト教の洗礼を受けた教派に属し、外国人の大多数も同様にそれぞれの教派に属している。ニューイングランド清教徒の影響は、厳格な安息日の務めがかなり薄れたとはいえ、いまでもそれなりの影響力を持っている。たいていの店は扉を閉ざすし、教会に通う人々の姿は傍目にも目立つ。人々は娯楽を慎み、波止場はひっそりと静まり返るのだ。(近藤純夫訳『イザベラ・バードのハワイ紀行』2005、pp.51-52)

その上、エマ女王<sup>30)</sup>は英国聖公会の熱心な信徒である。もちろん、イザベラはその教会(英国大聖堂)へ出かけた。ここには完全な安息日がある。しかし、日本では外国人の暮らす居留地は別として、一步、日本の中に入るとそこは異教徒の世界であった。1871年に、福井藩に来たお雇い外人教師のグリフィスは次のように述べている。

翌日は安息日のない土地での安息日であった。目をさますと上天気である。空は青く雲ひとつない。あたりは静寂そのもの。福井の日曜日をいかに過ごそうか。何もかも、ないものばかり。鳴り響く教会の鐘、教会、会堂の腰掛け、講壇、市内電車、舗道、日曜学校、親友。私は庭の門まで歩いて外の通りを眺めた。あいかわらずいそがしそうに大勢の人が行き来していた<sup>31)</sup>。(『明治日本体験記』p.123)

グリフィスが「何もかもない」と言う時、結局はキリスト教がないと言っているのと同じだ。彼の挙げた教会の鐘、会堂の腰掛け、そこに集う人々そのどれもがキリスト教を示す記号だ。自己の存在のよりどころである教会の非存在は、無のように空っぽの空間と感じられる。安息日に活動する人々の異文化で埋め尽くされている異空間なのである。

次はイザベラの記述である。

「次の日は安息日である。」この安息日という言葉は、ここ日本では何の意味もない。とはいえ、安息日であるので、休むことなく活動を続ける通りをぬけて、心安まる芝の静かな木立へ、聖餐式が執り行われる小さな寺へと馬車を走らせた。そこでは仏教（ブツダ）の祭壇と聖堂に代わり、素朴な聖餐の卓が置いてある。畳の上の何脚かの椅子が質素な集会のために用意されている。（傍点引用者）（『バード日本紀行』 p.31）

ハワイでイザベラが記した「鳴り響く教会の鐘、晴れ着をまとい教会へ向かう人々、安息日を守り閉ざされた店」と人々に安息日が浸透しつつある姿を書いたのとは対照的に、全く安息日のない世界が日本だった。再びグリフィスの言葉を借りるならば「何もかもないし、反対に安息日を知らない人々は労働に忙しい」といい、同様に彼女も「休むことなく活動を続ける通り」と、安息日とは正反対の行動をする日本の街角にキリスト教精神の欠如を見る。だからといって、キリスト教に勝利がなかったとはいえない、グリフィスが記した1870年代前半とは異なり、彼女が来た時日本は西洋の太陽暦を取り入れていた。1876（明治9）年には、太政官第279号布告により官庁の休日が日曜日に定められた。さらに政府は1878年4月1日よりキリスト教の安息日＝日曜日を国民的な休日とすることで、欧米に日本の近代化を示した。これで学校も官庁も安息日は休日になった。しかし、それでも日本人々にとってその日（安息日）が何かの意味を持つということとはなかった。

上記のイザベラからの引用は、芝の小さな寺で執り行われた6月2日の聖餐式に向かっている記述である。敬虔なクリスチャンである彼女は日本でも可能な限り安息日を守り、聖餐式に出席しているのである。

しかし、これは彼女が奥地の旅に出発する前の東京でのことである。こののちイザベラは異教の地でひとり安息日を過しながら、その旅の記録にその日が安息日であることを綴ることになる。

## 2) イザベラの安息日の記述

以下に記したのはイザベラが日光を発つてのちに記した日曜日の記述である。

- |     |  |
|-----|--|
| 場所  | 月日（日曜日、または土曜日）   |
| 車峠  | 6月30日：つらかった六日間の旅行を終えて、山の静かな場所で安息の日を迎えることができるとは、なんと楽しいことであろうか。                                    |
| 新潟  | 7月7日：私はそのうち五人と英国聖公会の聖餐式を受けた。   |
| 小松  | 7月14日：私は小松で日曜日を過したが、夜池の蛙が鳴いていたので、よく眠れなかった  |
| 神宮寺 | 7月21日：低くて暗く、悪臭のする部屋しか見つからず、そこは汚い障子で仕切っただけで、ここで日曜日を過すのかと思うと憂鬱であった。日曜日の朝五時に外側の格子に三人が顔を押しつけているのを見た。 |
| 大館  | 7月28日：土曜の晩（27日）に私が床について間もなく、伊藤が年老いた鶏を持って入って来て私の眼をさました。   |
| 黒石  | 8月4日：私たちは土曜日（3日）の朝早く出発した。  |

日光金谷家での2回の安息日を除いて、日曜日を示す記述は欠けることなく記載されている。彼女の紀行の日付にはいくつかの問題があるが、その中で几帳面に書かれているのは、日曜日が来たこと・来ることを示すものである。その反対に彼女の紀行に土・日以外の曜日が記載されるのは稀である。キリスト教徒にとっての時は、安息日を刻みながら動いているのである。しかし、新潟を出てからの安息日はやがてその日の来ることを記すだけになっている。

## 2. イザベラ・バードが訪れた英国国教会（聖公会）の伝道拠点

つぎに、「可能な限り伝道拠点を避けていた」という③の検証をするために、日本旅行中に彼女が訪れた伝道拠点と宣教師たちについてみてみよう。

### (1) CMS (Church Mission Society英国国教会伝道協会) の活動

まず彼女の旅の拠点となった日本におけるCMSの活動を概観する。CMSは英国国教会（聖公会）に属する宣教組織である。イザベラが日本に来た当時は3つの聖公会の組織（CMS、SPG、アメリカ聖公会）がそれぞれの居留地で伝道を開始していた<sup>32)</sup>。

1859年7月に長崎、横浜、函館の3港が開港され、米国聖公会（The Episcopal Church of United States）のリギンズ師（Rev. Ligins, L）とウィリアムズ師（Rev. Williams, C.M.）は、長崎で宣教をはじめた。10月に米国長老教会伝道局からヘボン博士（Hepburn, James Curtis）<sup>33)</sup>が来日、続いて同局の3人の宣教師が来た。バプティスト教会からも1人の宣教師が来日して、開港1年後には7人の伝道者が日本で活動していた。

日本におけるキリスト教伝道は、1873年に明治新政府によりキリスト教禁制の高札が撤廃された時から本格的にはじまった。英国国教会も例外ではなく、SPG（Society for the Propagation of the Gospel 英国聖公会福音宣布協会）はこの年9月に2人の宣教師を、CMSは1873年から1875年の間に6人の宣教師を日本に送った。この頃、条約で開かれた7ヶ所の外国人居留地に形成された英国国教会の伝道拠点配置は、1878年には継続していた（表2）。

表2. 英国国教会（聖公会）の伝道拠点配置（1878年）

場所	所属	名前	在日期間
東京築地	CMS	パイパー (Piper, John)	1874~1880
東京芝	SPG	ショウ (Shaw, Alexander C.)	
大阪	CMS	ワレン (Warren, C.F.)	1873~1899
		エヴィントン (Evington, Henry)	1874~1909
函館	CMS	デニング (Denning, Walter)	1873~1882
新潟	CMS	ファイソン (Fyson, Philip Kemball)	1874~1919
長崎	CMS	モンドレル (Maundrell, H)	
神奈川	SPG	W.B.ライト (Wright, William)	
神戸	アメリカ聖公会	フォス、プランマ	

イザベラは横浜、東京（築地）、新潟、函館、神戸、大阪に置かれていた英国国教会の伝道拠点を訪ねたと記している。これらはすべて外国人居留地のある開港場または開市<sup>35)</sup>であって、そこは「伝道の自由の範囲内」でもあった。彼女の「出来る限り避けた」という記述にもかかわらず、彼女は英国国教会のすべての伝道拠点に立ち寄っており、これらの宣教師たちおよび彼らの夫人と会ったと考えられる。

注.『英国国教会伝道教会の歴史』<sup>34)</sup>の記述に加筆して作成

### (2) イザベラが伝道拠点で会った人々

#### 1) その概要

彼女が来た1878年は、英国国教会伝道協会の日本伝道にとって大きな出来事のあった年であった。この年に、築地居留地内の京橋区明石町52番地にCMSの聖堂（聖保羅教会）が落成した。4月7日には、新礼拝堂で初めての礼拝が行われ、また、5月5日には香港のバードン主教〔監督〕（Bishop Burdon, John Show）により献堂式が執り行われた。この式典には英国公使ハリ―パークス卿も出席した。続いて12日にはSPGと米国聖公会関係者も招いて特別礼拝が行われた<sup>36)</sup>。

イザベラはこの会堂新設のお祝いの熱が未ださめやらない5月下旬に日本にやって来た。そしてこの落成して間もない教会の建物をイザベラは訪れた。この教会の隣（居留地51番）はCMSの宣教師館があった。ここで新潟から来たファイソンや函館のデニングと会ったのだが、彼らは落成した新会堂の式典のためにそれぞれの任地から東京に来ていたのである。公使館滞在中の



6月のはじめ一週間をイザベラは横浜居留地245番地のヘボン宅に滞在していた。「香港のバードン監督夫妻も客となっていたので、たいそう楽しかった」<sup>37)</sup>と相客がいたことを記している。バードン主教は1853年に中国に入り、1862年にはじめて北京に在住し、のちにCMSで10人目の主教(1874)となった宣教師である<sup>38)</sup>。のちの彼女の中国旅行を考える時、中国既に20年以上の布教活動をしていたバードン主教との出会いは何を彼女にもたらしたのだろうか。それとも彼女の言うとおりの彼は中国・香港での伝道について何も教えてくれなかったのだろうかという疑問が湧いてくる。彼女は日本旅行の帰路香港に立ち寄り、主教夫妻の家に滞在して、新年を広東で迎えているのだから。

Unbeaten Tracks in Japanのなかで彼女が実際に会ったと記している人々、および伝道に携わっていたとしてその名を記している人々を、表3に示した。

表3. 日本でイザベラ・バードが会った或は名前を記したキリスト教に関わる人々

日時	会った場所	名前	所属・その他
5月20日	横浜港	ギュリック医師 Gulick, Orramel Hinckley	アメリカン・ボード宣教師、1876来日。 米国聖書会社
5月27日	東京 築地 CMS (聖パウロ)	ファイソン師 (新潟から出張) デニング師 (函館から出張)	1874 年来日、邦語聖書翻訳に携わる 1874 年から函館で伝道
	築地 SPG 築地 築地 芝SPG (聖アンデレ)	ライト師 (夫妻) フォールズ宣教医 マクドナルド師 (休暇中) ショウ師 (夫妻) F・ショウ姉 アワー姉 (Miss Hoar)	SPG スコットランド一致長老教会 カナダ・メソジスト イザベラは芝の聖餐式に行ったと記している。ショウは英国公使館付きの宣教師
6月のはじめから7日	横浜 山の手	ヘボン博士 (夫妻) バードン主教 (夫妻) (香港から)	アメリカ長老教会伝道局 1859年来日 C.M.S.聖パウロ教会献堂式のため来日中
7月	新潟 英国聖公会	ファイソン師 (夫妻) パーム博士 (Dr.Palm) 宣教医 T.A. (セオドール) 押川方義 ファイソンから洗礼を受けた5人の日本人 (7人中)	エディンバラ医療伝道団派遣(パーム医療伝道団) 押川はバラ塾で弘前の本多庸一 <sup>39)</sup> らと共に学び受洗した。1886年仙台神学校(東北学院)、宮城女学校(宮城学院)設立。
8月	青森(黒石) 函館	脇山、山田、アカマ [山鹿?] デニング氏 (夫妻) ニコライ師 小川 (福音伝道師)	弘前美以教会所属(3人のクリスチャン学生) 英語教師、アイヌ伝道 ロシア正教(ギリシャ正教と書いている)
10月20日～	神戸	ギュリック師の一家 アメリカン・ボードの宣教師たち	ギュリック (F.H.、O.H. (夫妻) 神戸山手教会、J.T. (夫妻?)、J.A.E.) (本稿p.20参照)
10月30日～	京都	新島襄 (夫妻) デービス ラーネッド (Learned,P.W.) デ・ソマーズ	同志社の創立 同志社 アメリカンボード宣教師
12月3日～	大阪	ワレン (ウォーレン) 師夫妻 テイラー宣教医 ベリー宣教医 アメリカの伝道関係者数人	英国国教会協会、 兵庫・大阪の医療伝道局を管理 医療伝道

表3には、表2の伝道拠点の人々の名前がみられる。またこれらの日付は、彼女がそれぞれの土地に到着した時点でその地の伝道本部を訪ね、そこからその地域の旅の第一歩踏み出していることを示している。

## 2) 日本プロテスタント史に名を残した人々との邂逅

### ① ギュリック一家とイザベラのサンドイッチ諸島(ハワイ)旅行

日本に上陸したイザベラは、真っ先に横浜港でドクター・ギュリックの世話を受けた。また蝦夷旅行から戻り関西旅行に向かった彼女を神戸で出迎えたのはミスター・ギュリックであった。この時のことを彼女は次のように記している。

…すぐに彼のニュー・イングランド風の家まで連れて行ってくれた。彼は、サンドイッチ諸島における初期の宣教師たちの中のひとりの息子であるが、彼 [Gulick, Peter Johnson] には6人の宣教に携わる子どもがいて、そのうち4人は日本にいるのだが、うち3人はここで彼らの尊敬すべき母親 [Fanny Hinckley] と同じ屋根の下に暮らしている。ギュリック夫人もまた、サンドイッチ諸島の生まれであり、私のハワイの友人である、セヴェランス夫人とオースティン夫人の姉妹である。<sup>40)</sup>

当時日本にいたP.J.ギュリックの子どもは次の人々である。長男の医師ルーサー・ハルシー・ギュリックとは横浜で会った。次男のオラメル・ヒンクリーが彼女を出迎えた。3男のピーター・ジョンソンは1878年京都の同志社で進化論の講義をしていた。末っ子で唯一の女子であるジュリア・アン・イライザもまた彼らと共に宣教師として働いていた。それぞれ結婚して家族がいた一家と彼女は神戸・京都で会ったと考えられる。また『ハワイ紀行』のなかで、彼女に滞在を懇願したと記されているS夫人とA夫人<sup>41)</sup>はギュリック (O.H.) 夫人の姉妹のセヴェランス夫人とオースティン夫人であり、彼・彼女たちもまたイザベラの旅で繋がる人の環の中にあっただ。

## ② 新潟で会ったパーム宣教医と押川方義

前述のように日本に来て間もなく、彼女は築地の聖公会の教会を訪ね、そこで、任地から上京していたデニングとファイソンというCMSの2人の宣教師に会った(本稿p.18)。その後、彼女はこの2人のそれぞれの任地である新潟と函館を目指して旅を続けることになる。

運河から新潟に上陸した彼女は「なんども人にたずねた結果、ようやく教会伝道本部に着くことができ」ファイソン夫妻に迎えられ、その地では聖公会のファイソン師とエディンバラ医療伝道会が送り出した宣教医パームが伝道に当たっていた。ここで彼女は、のちに東北学院、宮城学院の創設者となった押川方義にも会っている。彼については「才能溢れたやる気満々の人物で、有望な伝道師だ。彼は全霊をキリスト教の仕事に捧げ、非常に精力的に伝道して回っている」と述べている。

押川方義が新潟のパーム医療伝道団に参加した経過はつぎのようであった。1875年に医療伝道団が新潟に「パーム病院」を設立した時に、パーム医師は横浜でヘボン塾を受け継いでいたS. Rブラウンに新潟での協力者の要請をした。ブラウン塾で学んだ押川は、その時は横浜公会に属していたが、その要請に応じ新潟へ行ったのである。イザベラが病院を訪問した頃、彼は医療団の宣教メンバーとして働いていた。1880年にパーム病院は新潟大火で焼失してしまい、それを期にかねてから東北伝道の重要性を考えていた押川と吉田は、新潟を離れ仙台を中心に伝道をはじめた。イザベラはプロテスタント東北伝道の緒につく前の押川と吉田の姿を新潟で眼にしたのである。

## ③ 函館で最初に訪れた聖公会伝道拠点のデニング宅

汽船で函館に着いた彼女は教会を兼ねていたデニング宅を訪れた。『英国教会伝道協会の歴史』には、次のように書かれている。

函館ではデニングが開港場の日本人だけではなく、アイヌを訪ねて奥地を旅することによって素晴らしい活動力を示した。この珍しい人々については、当時はほとんど何も知られていなかった。英国の読者が彼女らについて知るようになったのは、主としてイザベラ・バード女史（Miss Isabella Bird 現在はビショップ夫人）の旅行記によってであって、彼女の価値ある著書『日本奥地紀行』（*Unbeaten Tracks in Japan*）は1880年に出版された。しかしこの写実的な著書によって与えられるアイヌに関する情報の大半は『インテリジェンサー』に印刷されたデニングの手紙を通して、すでにCMSの関係者の手に入っていたのである。（文献34、pp.55-56）

この記述には、彼女のアイヌに関する情報はデニングにより既にCMSにもたらされていたとある。彼女がアイヌと生活したベンリ宅はそれ以前にデニングが1ヶ月にわたり伝道拠点として宿泊した家なのである。さらには、その家はオーストリア公使館のフォン・シーボルトやディースバッハ伯爵の宿泊先でもあった<sup>42)</sup>。

#### ④ 新島襄・赤松連城との邂逅

京都では京都カレッジ（同志社）を訪れ、新島襄夫妻にも招待されている。初版第52信は同志社と新島襄についての記述で埋められている。次の第53信には門徒宗の高僧赤松連城<sup>43)</sup>との対談が書かれている。そこには、当時の日本の宗教の置かれていた現実と、イザベラに問われて答えた赤松のキリスト教の展望が記されている。

ここまでみてきたようにイザベラが出会ったのは、日本のプロテスタント伝道の初期に日本における教会構築とその後のミッション・スクールの歴史に残る人々である。彼女はこれら日本のキリスト教組織の構築に携わった人々の姿を眼にして、じかに話をした。彼女の日本伝道に対する意見は、これらの事実裏付けられたものとするべきであろう。そこで、彼女の著書のなかではこれらの人々の伝道活動について、どのように評価し、記述しているのかの検討が必要になる。だがその前に、彼女の東北旅行のルート選択について見ておこう。

### (3) 旅程途上の東北地域で彼女が接触をしなかった西洋人

上述のように、イザベラは日本旅行の行く先々で伝道拠点を訪れていたにもかかわらず、のちには彼女自身が、「可能な限り伝道拠点を避けていた」（本稿p.13）と言っている。外国人の踏み込まない土地を旅しようとしていた彼女には、そのような意図も一方であったのかもしれない。CMSの伝道拠点ではないにしても欧米人が伝道拠点としていた幾つかの土地とお備い外人のいる町もあった。そしてそこを避けたのではないと思われるような記述もみられるのである。

1878年の東北で既に伝道拠点となっていた町のひとつは青森県弘前である。ここには、1875年に横浜バンドの流れをくむ本多庸一らによって日本基督弘前公会が創立された。この教会は1877年にメソジスト監督教会所属となり、彼女が来た時は、東奥義塾のお備い外人教師であったデビソンが宣教師として夫妻で居を構えていた。その弘前に近い黒石に彼女は8月3日から6日まで逗留したのだが、そこには同教会の出張拠点が設けられていた。西洋婦人（イザベラ）が来ていることを聞きつけたクリスチャン学生3人が訪問したので彼女は驚いたと記している。その時彼女は彼らの師に会うように勧められたと思われるが、彼女はわざわざ弘前まで足を延ばしてまで西洋人に会いには行かないと述べている<sup>44)</sup>。

ところで、イザベラが青森県に入る前にこの教会の存在と活動について知っていたかどうかは実際には分からないが、彼女にはそれを知る機会があった。彼女の来た2年前の1876年には、先述のギュリックL.H.とデニングは、設立されて間もない弘前公会の応援に来ていたのである。しかし、東北を旅するという彼女に彼らはこの本州北端の地にある教会のことを知らせなかったのだろう

か。彼女は知っていて、弘前を訪れるのを避けたとも考えられるのである。また彼女はこの黒石でのクリスチャン学生との出会いをデニングとは函館で、ギュリックとは神戸で会った時話題にしなかったのだろうか。黒石の例は、東北の地で宣教に携わっていた西洋人との出会いを避けた例であるのかもしれない。

確かに東北の旅行では彼女は西洋人を避けようとした節がみられる。

日光を出て鬼怒川沿いの道を進んだ彼女が福島県に入り止宿したのは川島という小さな村である。そこは、当時南会津郡の郡庁があった田島（彼女は美しい町と褒めている）と目と鼻の先である。彼女は体が悪くもう進めないという状態であったと記しているが、ゆっくりときれいな宿で休む代わりに、惨めな宿（と彼女が記している）に彼女は泊まったのだ。またそこからの街道は会津若松に通じていたが、彼女が選択したのは市川（市野）峠を越えての市川、高田、坂下、野尻から県境の町であった津川（現・新潟県当時は福島県）のルートであり、会津の中心都市であった若松に立ち寄ることはなかった。新潟での滞在ののち山形経由で秋田県へ入ったルートも、同様に米沢・山形といった中心都市を避け上小松、上山、金山といった土地に宿を求めている。彼女は可能な限り大きな町の宿屋を避けたようである。つまり御雇い外国人のいるような都市を避けたと考えられるのである。彼女は久保田（秋田）で以下のように述べている。

もうヨーロッパ人に会いたくない。実際に、私は彼らを避けるために遠く離れた所へ行こうとしている。私はすっかり日本人の生活に慣れてきた。このように一人ぼっちの旅を続けた方が、ずっと多くの日本人の生活を知ることができるのではないかと思う。

また、蝦夷の記述では、宣教師や領事館の人々と別れを告げアイヌとの生活のため出発する彼女の‘Good-by for a long time’と弾んだ気持ちが聞こえそうである。そしてこの姿勢（現地人の中に共に在ること）は、以下の1893年ロンドンのエクセターホールでの講演記録にもみられる。

私はこれまでポリネシア、日本、中国南部、マレー半島、セイロン、北部インド、カシミール、西チベット、そして中央アジア、ペルシャ、アラビア、小アジアを訪れました。これらの国々ではどこでもヨーロッパ人の居住地をできるだけ避けてきましたし、望めば伝道拠点に滞在できる場合であっても長居することはめったにありませんでした。現地の人々の中で過ごそうとしてきたのです<sup>45)</sup>。

伝道拠点ではなく現地の人々のなかにありたいとするイザベラの姿勢は生涯の旅を通して貫かれた。しかし他方、日本では彼女が長く宿泊した先は英国国教会伝道協会の拠点や英国公使館であったのも事実である。

### 3. 宣教師たちは何も話してくれなかったのか

前節では、イザベラは日本におけるキリスト教伝道拠点であった条約港の居留地を訪ねその地で宣教師たちと会っていたことがわかった。それでは、彼女の言うように「伝道会や宣教師たちはその仕事や方法について何も話してくれなかった」（本稿p.13）のだろうか。ここではこの問題について考えてみよう。

#### (1) 記述された医療伝道

*Unbeaten Tracks in Japan*には彼女の訪れた築地、横浜、新潟、函館、神戸の各教会の伝道師数が記されているが記述は正確である<sup>46)</sup>。また各宣教会礼拝や聖書学級への出席者数などが記されている。この当時、彼女はビショップ医師と結婚の約束をしていたこともあり、特に医療伝道に関心があったと考えられる<sup>47)</sup>。

ストッダート（文献10）によれば、1877年（日本に来る前年）の彼女は、インドとアフリカで働く医療伝道と女性看護師養成を目的とする「リヴィグストン医療伝道記念大学」の設立のための企画バザーに奔走していたという。ビショップ医師もまたこの企画に熱心であった。そして、彼女は「一般にバザーには興味がなかったが、この企画の目的は宣教団の装置に不可欠の要素として、彼女の気持ちにすっかり適っており、その準備のために身も心も投げ出した」、と言うのも「この事業は、くだらない記念碑などではなく、生きていて希望のない人々に生命を与える希望の源を与えるものだからである」と考えていた。つまり医療伝道は明らかに彼女の心の内において、それは「キリスト自身の方法として熱心に提唱した」ものであったのだ。（p.95）このバザーのために彼女は『バザー・ガイド』を書き2千部が売れ、バザー当日（1877年12月13,14,15日）は絵画を売る役を引き受け「レディ・ペイトンと私は630ポンド稼ぎました」とウィロウビー夫人への手紙に書いた。（p.99）しかし、それ以上に彼女の果たした役割が大きかったのは多くの有力者（貴族の夫妻）の名前とバザーへの援助の約束を手に入れたことだった。（p.95）この医療伝道への関心は日本旅行の時にも継続しており、医療伝道に関する彼女の記述は多い。

新潟と神戸・兵庫では、パーム宣教医とテイラー博士が活動していたが、彼女は彼らの施療院を訪れ医療伝道の実際について記している。新潟ではめいめい番号札を受け取った患者たちに「必ずキリスト教に関する講話がある」が、「それを聞くことを強いはしないとパーム宣教医は考えている」と、医療伝道についてのパーム医師の考え方について具体的に述べている。兵庫と大阪では、テイラー医師とペリー医師の医療伝道について、「新潟のパーム宣教医とは異なるやり方をしている。パーム博士とくらべると、あまり独立しておらず、見たところ宣教師らしくない。」と言ひ、それぞれの施療院の活動方法を比較している。続けて彼女は「今・繁栄している<sup>きん</sup>三田、彦根、明石の伝道拠点は、医療伝道師達の努力のたまものである」と、医療伝道の布教への貢献が大きかったことも述べている。

また、京都からの第52信では「伝道活動をするにあたって、アメリカ人がとった現実に即した賢明な方策は言及に値する。彼らはキリスト教改宗者の数よりもその質をはるかに重視した」、神戸からの第58信では「三百五十人の会員を抱える神戸集会は教会建立に千ドル近くを寄付し、貧しい会員達を支え、極貧の病人には薬を出し治療し、牧師に給料を払っている上に、さまざまな慈善事業に携わっている」などと、彼女が伝道の状況を知っていたと思える記述が多くみられる。

ところで、イザベラは記していないが、勝海舟の孫に当たる梅吉と結婚したクララ・ホイットニー（Clara Whitney）の『クララの明治日記』には、6月3日に彼女の母が横浜でイザベラと会ったことや、北日本の旅行からもどったイザベラがYMCAのパーティに出席したことも記されている。この日記には、ヘボン夫人、ギュリック夫人、ミス・ファニー・ギュリック、パイパー夫人など宣教師の夫人や娘の名前が挙がっている。これらのパーティでもイザベラは日本の諸事情や伝道について多くの情報を得ることができただろう。

クララはイザベラのことを「誰にでもしつこくいろいろきき出そうとするので、誰も側に行きたがらない人物なのだ」<sup>48)</sup>（傍点引用者）と書いている。パーティに置いてけぼりを喰った18歳の少女の不満としても、彼女の言うとおりにすれば、イザベラはいろんなことを聞きたがっており、一方で、イザベラの言う「伝道会や宣教師たちは何も話してくれなかった」ということが実際にあったかもしれないということになる。面倒を避けたい狭い外国人社会では、彼女のように本当のことを聞き出そうとする者がいたならば、それは歓迎されないものであったろう。

前節でみた彼女の訪れた伝道拠点や会った人々と、医療伝道などの記述からみて、彼女には、伝道状況に対する関心があり、また彼女には避けたいという気持ちがあったとしても伝道拠点を訪れ、そこでは多くの人々に会ったということができる。また彼女自身が満足のいく話を聞けたかどうかはべつとしても、話を聞きだそうとし、それに対しての応答は確かにあったということはいえるだろう。

しかし、そうであるならば、なぜ後年になって彼女は「宣教師たちは教えてくれなかった」と述べたのだろうか。

## (2) 削除と伝道活動に影響を及ぼす懸念——ハワイと日本

1878年の日本旅行の前に出版されたハワイ紀行（初版1875）の第2版（1876）には、伝道についての記述と削除の関係が明確に示されているので、まずこれを取り上げて検討する。

第2版の序文の最後の部分には以下のように記されている。

そのほかには、ホノルル・ミッション（ハワイ伝道）の見通しを述べた一節を削除した。これはキリスト教の伝道を成功させようという見地からすれば、活動の意志を削ぐとの判断による。

I・L・B 1876年6月 エディンバラにて<sup>49)</sup>

この日付からわかるように、上記引用文にみられる懸念は彼女自身のうちに日本旅行以前からあった。『ハワイ紀行』には、初版でも第2版でもキリスト教・伝道・伝道協会に関わる記述がいたるところにあり、キリスト教を受け入れた異教の地への視点がみられる。しかし、その中のたった「一節を削除した」のは、その記述がハワイ伝道への意欲を削ぐことになるのを恐れたからであると記されている。

ところで、近藤純夫による訳は第2版によるものであることが記されている。したがってここに述べられた削除部分は訳出されていない。いったい彼女はどのようなことを書きそして削除したのだろうか。以下に初版に記述されていた削除部分を示す。

### ① ハワイの伝道に関する初版からの削除部分——その私訳

*The Hawaiian Archipelago The Six Months among the Palm Groves, Coral Reefs, and Volcanoes of the Sandwich Island* (John Murray, 1875) pp.437-438

近藤純夫訳『イザベラ・バードのハワイ紀行』p.462-4行目に続く部分

実のところ、私は「ホノルル伝道」は最初から間違いがあったのではと考えています。厳密に言うと、ただ伝道の余地がないというだけのことです。どういうことかという、すべての先住民が名目上はクリスチャン<sup>訳注1]</sup>で、多かれ少なかれ組合教会主義（個々の教会が独立自治を行い教会員自ら牧師、役員を選ぶ組織）と関連しています。彼らを英国国教会に改宗させるか、または、なんとかして彼らの宗教的絆を揺るがそうとする試みは、概して望みがなく、むしろ悪意のある仕事のように思えますし、ことによったら、彼らのうちの幾人かをローマ・カトリックのより大きく見えている統一体のなかに、追いつめ結果になるかもしれないのです。眼には見えない教会の統一体の存在を信じ、“ひとりの主、ひとつの信仰、ひとつのバプテスマ”を抱くものは皆、救済の囲われた柵の中にいるのですが、彼らは改宗するために要する労力に活力、人力、お金や時間をかける前に躊躇するといついでいでしょう。

怠惰と無神論のぬかるみ——公然たる不道德の生活ではないにしても——に陥っている白人たちの間では、福音伝道の努力に値する疑いのない活動領域があるが、しかし、私が思うには、この社会層が、本能に訴えかける宗教活動によって、現在有しているものより高い文化に辿りつくことができるかどうかは極めて疑わしいと私は思うのです。そして、実際に一般的に、島の国教会監督たちは皆最初から、この「伝道」の目立った特長であった「象徴主義」や「高踏的な儀式」に好感をもてなかったのです。

祈祷書の原理に関する若者の教育は司祭と彼の補助者の目的とされたが、熱意と献身にもかかわらず、これらの島（サンドイッチ諸島）における英国国教会はこれまで、ただ思い悩んでいるだけで、あきれるほど外国風であったとしか言いようがないのではないかと私は危ぶんでおります。（）内は訳者  
[訳注1] ハワイ王朝はカメハメハ2世の時代であった1825年にキリスト教を国教として受け入れた。

以後、アメリカ人宣教師を通じてのアメリカの影響が大きくなった。

この文では、1820年ハワイにキリスト教の宣教団が上陸し、わずか5年でハワイが西洋化（キリスト教を国教とした）した現状を踏まえて、ホノルルはアメリカの宣教協会の伝道によりすでに埋めつくされていて、CMSの入る余地はないのではないかと語っている。しかし現実には、CMSはハワイ伝道を展開しており、彼女のこのような陳述は伝道の意欲をそいでしまうか、あるいは英国内において海外伝道に対する物議をかもし出すかもしれないという問題を含んでいる。彼女の削除した理由ももっともなのである。

また、*Unbeaten Tracks in Japan*にもこの問題について以下に示すように初版(1880)にはあったがその後の版では削られた文がある。

## ② 省略版における黒石部分での削除

私は、これらの文が手紙に書かれたままにしておきます。しかし、これらが宣教の仕事に反対している、あるいは宣教の必要性を疑って書かれたと思われるといけけないので…（本稿p.6）

## ③ 新版（1900）における初版第58信（Ⅱ、pp.303-304）からの削除

さまざまな宗派の当事者達は外見上の対立さえも控え、親しく協議するために集会を持っている。監督教会派、バプチスト派、組合教会派等という区々の名称を永続させるのではなく、「キリストの弟子であることが優先される」のである<sup>50</sup>。

この部分は1885年の省略版で削除された部分の一部である。彼女は、省略版で削除した部分を復活させた新版でも、③のこの部分だけは削除した。これは日本における初期の伝道にみられた超宗派の伝道に関する記述である<sup>51</sup>。「外見上の対立さえも控え」というところに問題がありそうだが、これに関しては、むしろここに記したような理想とされた超宗派の伝道は、新版の出版時には解消され、それぞれが独自の教会を持つようになっていた現実にあわせたことによるものと思われる。さらには、1900年の時点において、かつては理想と見えた超宗派伝道に対する考えが変わっていたということも考えられる。

これらハワイ紀行および日本紀行における削除は、キリスト教社会における彼女の立場を表していると思われる。キリストの最後の言葉による究極の約束を遂行する伝道者たちに対する批判部分の削除は、いかなる揺らぎが彼女自身にあったにせよキリスト者としての立場—宣教への支持—を明確に示すためだったと考えられるのである。

ここまでみてきたことから、イザベラ・バードは伝道拠点に立ち寄り、多数の伝道に関わる人々と会って話をしていたこと、キリスト教やその伝道についても非常に多く記述していたことがわかった。伝道に興味がなかったはずはないのである。それでは、「キリスト教伝道に興味なかった」、「伝道会や宣教師を鼻であしらうのを楽しんでいたふしさもある」などと後に記したのはどのような理由によるのだろうか。

宣教師たちは彼女に何を話したのだろう。築地のCMSには「たった一人の伝道者」しかいない（他の教会には複数いるのに）と記し、新潟では「ひとりぼっちの宣教医」を送った宣教協会の「曖昧な政策」を批判的に述べている。また大阪・兵庫ではテイラー医師の活動について、「けっして診察や薬の代金を受け取らない」、「人びとが薬代も払えないようなところでは、篤志家達がそれらを確保するために寄附している」し、また「神戸在住のキリスト教徒達は、かれらの慈善団体に属する生活必需品にも事欠く人びとに薬など必要なものを供給している」と、医療伝道の実態を記している。彼女が「けちで欲深い、愚図な教会」という時、伝道の力となるべき人的、

物的資源の絶対的不足を念頭において、「もっと」そして「はやく」人材も資金も送るようにといらだっているように見える。

#### 4. 矛盾する記述の背景

ここまでの検証で『中国紀行』における彼女の日本旅行時に関する記述には、矛盾があることが分かった。そこでその理由が問題になる。もう一度問題を整理してみよう。

まず彼女の日本旅行記である *Unbeaten Tracks in Japan* (1880) には、キリスト教や伝道活動についての記述が多かった。しかし5年後の省略版出版(1885)の際にそのほとんどが削除された。さらにそれから8年後の講演記録(1893)と15年後の『中国紀行』(1899)では、伝道活動に関心がなかったと、日本旅行記の中の記述自体を否定するような発言をしている。しかしその1年後の新版(1900)では、キリスト教や伝道拠点訪問を含む初版のほぼすべてを復活させた。

この背景には、3つの理由が考えられる。第1に、出版に関しての事情がある。第2に英国国教会の宣教体制という組織の事情がある。彼女は自分の著書がこれに影響を与えることを恐れていた(本稿p.24)。第3に彼女自身の社会的立場に変化があったことが考えられる。もちろん、彼女自身の精神的・思想的変化はあったと考えられるが、ここでは、そのことには踏み込まない。

第1に出版事情からみると、省略版(普及版)の出版はこの本が書かれた当初から考えられていたことを楠家が確認している<sup>52)</sup>。ケプロンやブラキストンのイザベラの著作への非難により省略版が作られたと指摘されてきたが<sup>53)</sup>、問題はむしろその非難が削除項目にどう関わっているのかにあると考えられる。ブラキストンの批判の中にデニング宣教師についての部分があるが彼が「言語について特異な才能を持っており、下層階級の人が話す調子まで自由自在にこなす (*Unbeaten Tracks in Japan* II p.13)」と彼女が記した部分を挙げている<sup>54)</sup>だけで、伝道活動に関しては、それが大きな削除理由になったとは考えられない。

それよりも省略版に何を残し何を削除するかという選択に当たり、彼女の古い日本の体験記の舞台となる「未踏の地」の見聞が優先されたと考えられるべきだろう。マレー社の狙いは廉価でより一般的に読まれる日本旅行記だったと考えられるからである。その結果、旅行記としては新鮮味のある北日本(特にアイヌに関する記述が評価されていた<sup>55)</sup>)が優先され、関西滞在の記述がすべて削られた。特にCMSの伝道拠点は関西中心であったため伝道活動についての記述の多くは、省略版に残らなかった。そうであるとする、問題なのは、その記述すらなかったかのような記述のほうである。

第2の英国国教会の伝道の方はどうだったのだろう。CMSとSPGが日本で宣教を展開していたが、ここではCMSの伝道についてみてみよう。彼女の伝道への「厳粛な疑問」(本稿pp.5-6)が具体的には、CMSを指していると考えられるからである。CMSの外国伝道の方針は「現地教会組織」(The Native Church Organization)主義である。会計をCMSと別立てにした日本人信者による献金での自給、日本人による日本伝道、そのための邦人教師の養成、邦人牧会者の養成がその基本方針であった。その結果として、自給教会はCMSの支援を離れ、しかし、その活動方針はCMSに従うという形での伝道をすることになる。北日本で多くの異教の民の生活を目にしたイザベラは、この方針に不安を覚えたに違いない。現地の自給教会に頼ってこれら何百万という異教の民を救えるのかと。実際首都東京での伝道さえ、たった一人の宣教師に頼っていた。

CMSの教会(聖パウロ教会)の現実には1883年には宣教師は一人もいなくなり、1884年には応援に来ていたファイソン師も帰英して、CMSは東京伝道を手放した形になった。このとき、聖パウロ教会は日本人による自給教会となりCMSの援助はなくなった。『聖パウロ百年史』には、この現地人による現地教会という方針は、「伝道事業の安楽死」ということも起きることになろう」と記している<sup>56)</sup>。これはイザベラの抱いた危惧と同様のものと考えられる。

1894年に、CMSは東京伝道の放棄を決定、「宣教協会(CMS)は勢力を大阪地方に集中するため



東京伝道を引き揚げ、二人の伝道者笛木角太郎と田中則貞は大阪地方に転任を命ず<sup>57)</sup> という宣言がでた。この宣言が必ずしも実行されたわけではなく、CMSは大阪からの応援という形での伝道支援を続けることになった。しかしながらもともと西高東低であったCMSの日本伝道はそれが顕著になっていた。これに関しては、CMSは「現地教会組織」基本方針を適用としたままで、ただその応用がいささか性急に過ぎたと言えるのではあるまいか<sup>58)</sup>、と『聖パウロ百年史』にも記されているように、キリスト教伝道がはじまったばかりの日本で、自立教会を維持して、教勢を拡大していくのは簡単ではなかったと思われる。

北海道（イザベラは蝦夷）では、彼女の来た翌年（1879）に、CMSから函館に送り出されたバチラー師が、アイヌ伝道で大きな成果を上げていた。しかし他方、彼女が記した東北の「未踏の地」における伝道には、CMSのみならずSPGもまた目が向けられなかったという事実があった。「問題提起①」のような彼女の記述は、宣教協会批判ととられる恐れが十分にあり（彼女もそう記している）、その鋭い記述は宣教師たちにかかわりのないことを暗に示す必要があり、「宣教師たちは何も教えてくれなかった」とのちに記したことも考えられる。

第3に、イザベラの事情をみてみよう。彼女の立場は、どのように変化していったのだろうか。彼女が来日した時、また*Unbeaten Tracks in Japan*の出版時点では、バード嬢であったが、1881年に結婚してビショップ夫人となった。5年後の1886年には夫が亡くなった。実際、彼女が言うように、伝道に対する支援は、この頃から本格的にはじめられた。

1887年に彼女はマル島トウバーモリィ（そこで妹が亡くなった）でYWCAの設立に携わり、さらに1888年にはYWCAで講話が行われた。1889年にスリナガルに妹ヘンリエッタの記念病院を、アムリットサルに夫の記念病院を建設している<sup>59)</sup>。

1893年について、アンナ・ストッダートは次のように記している。

1893年の後半を彼女は10月と11月を絶え間なく続く講話と講演に費やした。それらはほとんど全てが伝道に関するもので、そのうちの二つはエディンバラの学生に対するものであった。これらの公布活動のうちの一つにより生じた影響はあまりに深甚なものであったので、彼女を壇上での講演者として有名にした。これまでは彼女は海外伝道と言う点については、広く知られていると言うわけではなかったが、しかし今や、彼女は、ユージン・ストック氏<sup>60)</sup>が述べているように、「ただちに伝道唱導者の第一人者として第一線に踏み出したのである。」そして、この講演は、多分異教徒へのキリストが宣べ伝えた大儀に対する彼女の最大級の貢献と位置づけられるものであろう。<sup>61)</sup>（傍点引用者）

この頃彼女は、伝道に関する講演を続けていた。彼女を「伝道唱導者の第一人者」に押し上げたのは、エクセター・ホールでの講演（本稿p.13に一部掲載）である。この講演の主宰者のヒル主教は、「ビショップ夫人は海外伝道唱導者の最も偉大なる人物の一人である」、また「当代のいかなる他の伝道唱導の講演よりも、一般の人々の心に働きかけた」と宣べ、その言葉は『英国教会伝道協会（CMS）の歴史』に、印刷されて、世界中で何千回となく回覧された。これは彼女を人気のある旅行記の執筆者であるだけでなく講演者としても社会に認めさせることとなった。

この頃の彼女の講演の冒頭では、「伝道活動に従事してきた者ではなく、一旅行者として」という彼女の立場が述べられたが、アンナ・ストッダートは、それが人々の心により効果的に働きかけたとも記している<sup>62)</sup>。イザベラは、彼女の講話が、伝道活動の内側からの視点ではなく、第三者としての視点であることを明確にしたかったと思われる。

1894年から1897にかけてイザベラは中国・朝鮮旅行をする。この旅行の間彼女は3回日本を訪れている。1894年は長崎から大阪・京都へ、1895年には、大阪から東京へと旅行した。このとき彼女は東京で、ピカステス（Bickersteth）主教夫妻の家に滞在した。そこはイザベラにとって「極東のわが家」であり、ピカステス夫人とイザベラとは宣教ミツクソンに関しても私生活に関しても深く共感す

るところがあった<sup>63)</sup>。彼女の滞在した主教館は芝のSPGの聖アンデレ教会であった。

1897年に英国に戻った彼女は福音伝道協会婦人委員会 (S.P.G Women's Committee) 副委員長という要職に就いた。くしくもこの年2月に、日本では、英国国教会系の3つの組織 (CMS, SPG, アメリカ聖公会) が日本聖公会として統一された。そして、「問題提起②」文の入った『中国紀行』の出版は1899年である。

これらのことを総合的にみて、彼女は、痛烈な伝道への批判の言葉が含まれた *Unbeaten Tracks in Japan* の初版の頃は「海外伝道活動に関心がなかった」と言わざるを得ない状況にあったと考えられる。

## 第IV章 考察：“unbeaten tracks” 「未踏」の二重の意味

### 1. 青森県黒石部分の聖書の言葉で綴られた記述

この節で検討の対象とするのは第I章「問題提起」で掲げた黒石部分の削除部分 (本稿pp. 5-6) である。この節で「黒石の信」という時はこの部分を指しているので参照されたい。

イザベラにとって、特に新潟を出てから函館に着くまではまさに安息日の存在しない世界=非キリスト教社会のなかの旅であった。この地域には外国人宣教師が許されて活動できる開港場から25マイルの遊歩規定も存在しない。そのような奥地をイザベラは、アイヌに会うために馬にまたがって津軽海峡を目指して進んでいた。そしてその宿泊先は領事館でも伝道拠点でもない「現地人の家またはyadoya (宿屋)」であった。異教の異邦人の国で旅路にあって、彼女もまたそこでは、人々の視線からは異教徒の異邦人である。そのとき彼女の心に湧き上がってきたのは聖書の言葉なのである。

「黒石の信」の追伸に書かれているように、これと同じ思いを綴った文は「新潟伝道の覚書」(以下「覚書」)の冒頭にもある。しかし、両者の間には明らかな違いがみられる。黒石からの信にはほとんどの文に疑問符が付いている。そしてその疑問文は、聖書の言葉で綴られその答えはなく、最後に「主の最後の言葉は、世界の果てまで、主に従う者のすべての上に、拘束力をもっている」と言う。これに対して「覚書」の冒頭は、「全世界に行き、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」(マルコ16:15)という聖書の引用からはじまるが、これこそ主の最後の言葉であり、そこには疑問符はない。両者のテーマは異教徒 (heathen) である日本人へ果たされるべきキリストの救済である。彼女は初版と同じ問題を二度書いて、普及版ではこのテーマに関してそのどちらも削除したのである。ここで黒石における信を主な考察対象とするのは、この手紙文が本州最北の地で書かれていることから、東北日本の旅行の結果としての思索がここにあると考えるからである。

第36信のこの黒石での文の前には、イザベラがはじめて伊藤を連れずに、ひとりで人力車に乗って遠出した時に眼にした光景が記されている。「彼らの家は今まで見たことがないほどひどいもの」であり、そこは「腰まで裸の男女」、「首からお守りをかけた裸の子ども」が、「泥まみれになったエデンの園の素朴な生活」を営んでいる地であった。彼女はその前の第34信に、3人のクリスチャン学生の訪問を受けたことを記している<sup>64)</sup>。彼らとの会話は、北日本の旅の間に見た数え切れない異教の民にいつか伝道により神の声が届くのだろうかと思案させるきっかけになったと考えられる。彼女の心に去来した「厳粛な疑問」は次の文に集約されるだろう。

「ただひとりの父なる神」は、何百万というご自分の異教徒の民の子の救済を、けちで欲深く、ぐずで利己的な——人間と金銭の双方に関して利己的で欲深さをもつ——教会の遅鈍さに頼るようになされたのだろうか。

上の引用文を「新潟伝道の覚書」と比べてみよう。「けちで欲深く利己的な教会 (a niggard self-

ish Church)」は「覚書」では「自分自身の利己心と冷淡さ (one's own selfishness and apathy)」となっている。selfishは同じだがniggard (けちで欲深い) という積極的な言葉はapathy (冷淡・無関心) と消極的な言葉に、またその対象は教会組織ではなくイザベラを含むキリスト者へと代わっている。黒石では「厳粛な疑問」と記された繰り返し湧きあがる問いは、「覚書」では「絶え間のない恥の感覚'a perpetual sense of shame'」となっている。福音を伝えねばならない数え切れない異教の民を眼にして、そのなすすべのなさ、見て見ぬ振りをして通り過ぎる旅人たる自己に対する言葉だろうか。そしてその悩みがあったとしても、キリストを信じる者は「キリスト教につきもののこの世の祝福と「生命と不滅」の希望を享受することで満たされる」というのに、異教徒にはそれが無い。この救いが無いことこそ異教の民にとっての最大の問題であり、またキリスト者にとって、キリストの声を伝えることこそ最大の課題であると彼女は思索を繰り返している。

彼女がキリストの言葉の届いていないこの奥地の旅の中で、彼らの単純な徳と悪徳を眼にした時、その胸に複雑な疑問が湧いてきたと思われる。泥酔やドンチャン騒ぎ、休まない安息日、つつしみのない裸、ちょっとした金銭のごまかし、宿場町に残る娼婦宿といった「悪気のない悪徳」である。また彼女が最も眼にとめたのは、人々の中に蔓延している迷信である。彼女は日本の多くの迷信について彼女の読者に紹介していた<sup>65)</sup>。こうした状態を彼女は、「子供っぽい低俗な迷信にどつぷりと浸かり、その結果以前のような宗教の重要性が失われてしまっているという事実は残る」とこの部分を原文では斜字体で綴っている<sup>66)</sup>。

裸で生活し、しかも羞恥心もなく混浴する人々、そして迷信に取り付かれている人々は、神をまだ知らないという理由で、それを知って神との約束を守らない人々よりも神の下す罰(鞭打ち)は少ないだろう。そして、この数え切れない異教徒を眼にしてイザベラは、あのキリストの贖いはキリストを知りうる人々のためだけのものであり、彼らの救済にはならないのか、3,400万の日本人のうち一体何人が聖書の言葉を知っているのか、このキリストを未だ知らない人々もまた父なる神の子なのだろうか、と彼女の胸に去来する想いを述べている。彼女はこの問題の鍵は伝道協会にあると考えていた。新潟のファイソン師とパーム宣教医について次のような言葉を残している。

それにしても、ひとりぼろちの宣教師をこのような寂しい地域に三年も放り出して、言葉の問題や日本人の無関心や気まぐれから起こる果てしない絶望と孤軍奮闘させるとは、英国聖公会宣教師協会も曖昧な政策を採ったものだ<sup>67)</sup>。

(傍点引用者)

ここではCMS(英国国教会伝道協会)を明らかに批判しているように見える。事実何百万というこの地の異教の民に対して宣教師の数は余りに少ない、というより、新潟以北函館までにはほとんど皆無だった。彼女に会いに来た学生たちが属していた弘前美以教会は東北で初のプロテスタント教会であり、そこにはたった1人のアメリカ人宣教師がいるだけだった。異教徒を改心させ西洋文明に導くための働き手、すなわち宣教師やその補助者が圧倒的に少ないのだ。

これらの記述からは、東北内陸部の旅を通しての開港場の居留地にわずかに開かれた「<sup>キリスト</sup>基督の体(教会のこと)」のみでこんなにも多くの異教人(日本人)を救えるのだろうかという想いが、彼女の心に去来していたことがわかる。彼女の記したアルカディアの子、エデンの園の民は決して救済された民ではなく、イブがリンゴを食べる以前の無知で裸で暮らす異教徒に過ぎないのである。アルカディアもエデンの園も未開と結びついた言葉である。ここに彼女はまだ神の手の及ばない「伝道の未踏の地」を見ていたと考えられる。

## 2. イザベラ・バードが括弧付の「未踏」に付した二重の意味

イザベラ・バードが騎馬旅行で進んできたのは、西洋人がまだ記したことのない「未踏路」であ

り、そこはまさに「キリスト教伝道にとっても未踏の地」であった。キリストの言葉の届いていない世界の果てはここにもあった。ハリー・パークス卿の提案を受け入れ、日本の旅に *Unbeaten Tracks in Japan* と名付けた時、イザベラの心に去来したのは、東北の農村の素朴で貧しい異教の民と蝦夷地の未開なアイヌの人々ではなかつたらうか。

イザベラ・バードは、未踏に括弧を加えることにより、未踏を言葉以上のものへと記号化した。もう一度括弧付きの「未踏」を振り返ってみよう（本稿p.10-11）。①③④＝「私が行きたい」、⑥＝「私が好きだ」②⑦＝「まだ…」、④⑤＝「…を目指す」と記されたこれらの表現は、いずれも「未踏路」へ踏み出す前に示され、「未踏の地」への前奏曲のように用いられている。であるならば、それは何を象徴するものなのであろうか。[此处（ここ）]は辿り着いた「未踏の地」だという表現ではない。むしろまだ「未踏の地」には至っていないという記号であり、そしてそれはすぐ「其処（そこ）」にあると読者に注意を喚起していると考えべきだろう。

彼女の最初の外国旅行であるアメリカの旅行中に「其処＝未踏の地」に至った時、彼女に沸きあがったのは、「私のもの」（本稿p.9）というピュアな感覚であった。ここでの括弧なしの未踏では、「愛情と正しい認識」、「私の記憶に焼きついている」、「狩猟人が抱く感覚とは別の…」という自然との一体の感覚が示されていた。では、日本旅行ではどうだったのだろうか。イザベラの「記憶に焼きついた」のは、貧しくとも満ち足り、そして安息日に働き戒律を知らない異教の民である。彼女が抱いた「未踏の地」の人々への「愛情と正しい認識」—宣教師たちが「抱く感覚とは別の感覚で」—は、アメリカ旅行で同様の理由で彼女が抱いた「皆私のもの」であるという感覚と共通のものであるといえる。

しかしそれだけではない。イザベラ・バードの括弧付きの「未踏」の表裏をなしているのは、「未踏の地＝その自然と人と文化の存在」と「キリスト教の未踏＝キリスト教精神の非存在」である。それこそは、「誰も数えることのできない（その存在すら知らないのだから）」異教徒の存在を意味している。西洋人にとっては未知の異邦人たちは、それでも、かの地にあつて、異教の神を信仰しているのだ。このことを暗黙のうちに知るものにとって、イザベラの発した記号——それが記号化された意味の二重性を有しうる——が舞台と活動の両面を同時に表出するものであることを了解するだろう。したがって、イザベラ・バードの“unbeaten tracks”には「西洋人が行かない未踏の地」と共に、聖書の言葉が伝えられていない「伝道の未踏の地」という二重の意味を有していたということができる。

## おわりに

イザベラ・バードの辿ったコースは、キリスト教伝道の及んでいない山間地にある村や道路である。宣教は条約により、「外国人遊歩規定」の「居留地の十里四方」という許された範囲での行動に限定されていた。これは単に外国人の行動範囲の問題というだけでなく「治外法権」撤廃問題と絡んでおり、明治政府の取引材料となっていたのである。1876年頃まではむしろ外国人の居住に関して寛大であった政府は、治外法権撤廃の機運の動きが起こったことにより、1877年に外国人の居留地外居住を再び禁止する方針をとった。開港場から遠く離れた「遊歩規定」の外にある地域に伝道の声が届くことはなかつた。

明治初期の伝道は、一方に不自由な宣教範囲、人的・物的不足、さらには言語上の未熟といった宣教師側の問題があり、他方被宣教民の側には、永いキリスト教禁制の歴史により培われたキリスト教に対する邪教・異教の偏見と、日本人の意識の根底とされる先祖崇拜は唯一神を信仰するキリスト教とは相容れず、多くの迷信や慣習が彼らの生活を縛っている、という現実があつた。また、個人と神の問題の間には、明治新政府の神道を主体とした宗教政策による新しい国造りも絡んでいた。国際社会において、文明国の一員として認められるために西洋化政策を進める一方では、国体としての日本古来の道徳・精神の維持を模索してもいたのである。このような状況において、イザ

ベラの東北山間部の旅はただ西洋人の知らない地への旅行というだけではなく、その地は彼女（西洋人）から見ての文明化以前、つまりキリスト教の声を聞く以前という時間軸の中に位置する伝道の未踏の地でもあった。

イザベラ・バードの日本旅行記である *Unbeaten Tracks in Japan* において“unbeaten tracks”はすべて括弧つきであった。彼女にとってこの言葉は特別な意味を持つ言葉に違いないというのが本稿の出発点であった。そして、それは上述のような二重の意味を持つものであるということを知ることができた。

初版本（1880）では、「伝道」と「未踏」が二重構造をなしていた。しかし、その5年後の普及版（1885）では、初版本の中のキリスト教とその伝道に関する部分、および日本の宗教や「迷信」に関する部分をほぼすべて削除してしまったため、字義どおりの第1の意味だけが強調される結果になった。ただし、彼女は生前に本書を再刊行（新版1900）するにあたって、初版本を復活させたのである。

明治初期の北部日本の勇氣ある旅行者として知られているイザベラではあるが、キリスト教に帰依するものであることもその一面である。彼女の旅の意義を理解するためには、彼女の記した多彩な日本の様相とそれに対する彼女の視点や思考を様々な角度から検討していくことが必要と考えられる。それを今後も筆者の課題としていきたい。

## 引用文献 & 注

- 1) Schliemann, Heinrich, 石井和子訳『シュリーマン旅行記 清国・日本』講談社 1998。
- 2) 宮本常一『イザベラ・バードの『日本奥地紀行』を読む』平凡社、2002。
- 3) 加納孝代、1995年、明治時代の日本論「イザベラ・バード『日本奥地紀行』—十九世紀最大の女性旅行家イザベラ・バード」国文学『解釈と観賞』1995 第60巻3号、p114。
- 4) 金坂清則「J.ビショップ夫人の揚子江流域紀行」—イザベラ・バード論のための基礎作業としての旅行記の部分訳を中心に—、『大阪大学教養部研究集録（人文・社会科学）第42編 1994。「イザベラ・バード論のための関係資料と基礎検討」『旅の文化研究所報告』Vol. 3, pp. 1-76, 1995。
- 5) 武藤信義「書評と紹介」「イザベラ・L・バード著・高梨健吉訳『日本奥地紀行』（東洋文庫240）平凡社」、栃木史心会報7、1976。
- 6) 楠家重敏『日本アジア協会の研究』、日本図書刊行会（近代文芸社販売）、1997。
- 7) 楠家重敏・橋本かほる・宮崎路子訳『バード 日本紀行』雄松堂出版、2002、p.345。レディ・カミング、マリアンヌ・ノースらレディ・トラベラーの実例を挙げて紹介している。
- 8) 高梨健吉訳『日本奥地紀行』平凡社（東洋文庫）、1973。本稿では同訳者の手により1973年版の改訳・改訂がなされた『日本奥地紀行』平凡社（平凡社ライブラリー）、2000年版を用いた。  
省略版（1885）の北海道部分を紹介したものとして、下記の2冊が出版されている。  
神成利男『コタン探訪記 日本の知られざる辺境 北海道編』札幌郷土研究社、1969。同、北海道出版企画センター、1977。  
小針孝哉『明治初期の蝦夷探訪記』さろるん書房、1977、（1911年の普及版の蝦夷部分訳である。アイヌ研究者の高倉新一郎による註解とアイヌの人たちの生活を知ることの出来る数葉の写真および川上澄生の版画が掲載されている）。
- 9) 文献7、p.359。
- 10) Stoddart, Anna M, *The Life of Isabella Bird*, John Murray, 1908、p.v。
- 11) 井野瀬久美恵によるレディ・トラベラーの4つの定義（1）白人の同伴者のいない女性のひとり旅（現地通訳、ガイド、荷役を連れている）、（2）多くの場合30代から40代の独身女性、（3）旅の費用は自己負担、（4）ヨーロッパ以外、おおむね当時「野蛮」といわれていた地域への旅であること、「白人女性として、初めて」の地を目的地とする。井野瀬久美恵『女たちの大英帝国』講談社 1998、pp.64-66。
- 12) 文献7、P.352。
- 13) この翻訳にあたり聖書からの引用および内容については聖母被昇天修道会弘前修道院院長北村節子シスターから多くの御教示とご協力をいただいた。感謝いたします。
- 14) 文献10。
- 15) 金坂清則「イザベラ・バード論のための関係資料と基礎検討」『旅の文化研究所研究報告』vol. 3、p.49。
- 16) アンナ・ストダートはイザベラの伝記に「結婚を申し込まれた」とのみ書いているが（文献10、pp.96-97）、オ

- リーブ・チェックランドはジョン・マレーとの手紙のやりとりから婚約は成立していたという（『イザベラ・バードの旅の生涯』日本経済評論社、1995、p.130）。
- 17) 本稿ではこれらの用語を「未踏路」-「既踏路」とした他に、日本語既訳で使われた「未踏の地」「西洋人の行かない地」などその場に応じて用いた。また「西洋人が書いていない」などその意味にあたると思われる表現も用いた。
  - 18) Bird, Isabella, *The Englishwoman in America*, John Murray, 1856. p. 2。
  - 19) Rev. Edward Bird イザベラがこの旅行から帰国して1ヵ月後に急逝した。
  - 20) “Ulster Revival”文献10. p.48. 18世紀中ごろにアメリカ植民地に広まった信仰復興運動。
  - 21) イザベラ・バードの論文一覧表は文献4 金坂（1994）を参照されたい。
  - 22) イザベラ・バード、近藤純夫訳『イザベラ・バードのハワイ紀行』2005。ホノルルのハワイアン・ホテルからの手紙には、「今日、ハワイ諸島には未開の地はほとんど存在しない。(p.469)」とあるが、初版では、この部分は‘There are very few strangers here now’となっていて、ハワイは閑散期に入り「今、当地には外国人はほとんどいない」と記されている。
  - 23) アメリカ・コロラド州。
  - 24) Burunton, Richard Henry (1841-1901)。1868（明治元）年政府雇いのイギリス人土木技師として来日。日本沿岸の灯台システムを構築。著書：徳力真太郎訳『お雇い外人の見た近代日本』講談社、1986。
  - 25) *Unbeaten Tracks in Japan*, I, John Murray, 1880, p.23。
  - 26) 文献7、p.50。
  - 27) 文献7、p.168。
  - 28) 「女子の寄宿学校」：「神戸ホーム」→「神戸英和女学校」（神戸女学院大学の前身）で、1875年（明治8年）キリスト教宣教師イライザ・タルカットとジュリア・ダッドレーにより開校された寄宿学校を訪ねた。京都の女学校は同志社女学校1876年創立。
  - 29) 文献10、pp.20-21。エドワード牧師の健康上の問題もありその地を離れハンティンドンシエアに落ち着いた。
  - 30) エマ女王：Emma Naca Rooke (1836 -1885) カメハメハ4世（カメハメハ大王〔1758-1819〕の孫）の王妃。
  - 31) グリフィス（Griffis, William Elliot）、山下英一訳『明治日本体験記』平凡社、1984、p123。 *The Mikado's Empire*, Book II : Personal Experiences, Observations, and Studies in Japan 1870 -1874の全訳。
  - 32) 1887（明治20）年にCMS、SPG、アメリカ聖公会の3組織が日本聖公会として組織を成立した。この組織成立にピカステス主教が関わっていた。
  - 33) Hepburn, (1815-1911) ペンシルヴァニア大学医学部眼科、1836年医学博士。S.Rブラウン、D.Cグリーンらと共に日本語研究、新約聖書の翻訳に当たる。1879年完、1890年から明治学院総理。
  - 34) 吉田弘・柳田裕訳『英国教会伝道協会の歴史』 聖公会出版、2003 (Eugene Stock, *The History of Church Missionary Society, Its Environment, Its Men and Its Work*, CMS 1899)。
  - 35) 1859年には江戸と大阪が開市。1878年には開市は東京のみで他の6港が開港されていた。  
この時の旅行で訪れなかった長崎には後に朝鮮旅行の途中立ち寄っている。Mrs. Bishop (Isabella L. Bird) , *Korea and her neighbors*, John Murray, 1898, (I) p.250。
  - 36) 『聖パウロ教会百年史』日本聖公会パウロ教会、1928, p.35。また同年、東京で聖公会3ミッション宣教会会議開催。
  - 37) 文献8、p.43。
  - 38) 文献34、p.28。バードン主教は、ギリシャ語から北京語への漢訳新約聖書の翻訳者のひとりである。香港の英国国教会主教で日本CMS,日本SPGを管轄。
  - 39) 1872年J.H.バラから受洗。1875年青森県に弘前公会（現日本基督教団弘前教会）設立。本多庸一は青山学院第2代院長。
  - 40) *Unbeaten Tracks in Japan* II p.213. 文献7、p.167部分の拙訳。
  - 41) 文献22、p.127。
  - 42) 文献8、pp.19、343、371、372、参照。
  - 43) 赤松連城（1841-1919）浄土真宗本願寺派。英国留学経験があり、英語を話した。
  - 44) 高畑美代子「イザベラ・バードに会った三人のクリスチャン学生と弘前教会・東奥義塾の活動」『弘前大学大学院地域社会研究科年報』第2号2006、pp.37-60。  
この文献44) P.47に誤りがあった。弘前公会に来たギュリックは、Gulick, Orramel Hinckley（オラメル・ヒンクリー・ギュリック）となっているが、来弘はその兄のGulick, Luther Halsey（ルーサー・ハルシー・ギュリック）である。イザベラ・バードは横浜でルーサーと会った。彼は1876年来日して、米国聖書会社を横浜に設立、1878年に神戸分社を設けた（神戸設置年は『神戸と聖書』神戸新聞総合出版センター、2001。『キリスト教歴史大事典』教文館では1879年）。彼の来弘目的は同伴のバラ、グリーンらとは異なり青森・秋田各地での聖書販売と伝道旅行であった（相澤文蔵『津軽を拓いた人々』弘前学院出版会2003、pp124-125参照）。またオラメル（神戸山手教会、『七一雑報』主宰）とは神戸で会っている。（本稿p.20参照）。
  - 45) 金坂清則『イザベラ・バード極東の旅2』平凡社、2005、p.129。
  - 46) 本稿p.19 表3の人々は文献7、p.17に記載された築地伝道拠点の人数に一致する。

- 47) 金坂（文献4）によると、後年には、ジョン・ビショップ病院、ヘンリエッタ病院を設立（1889年）。イザベラ自身も看護を学んでいるが、病院設立の考えは、このような医療伝道の実際を目にしたことによるのか、それ以前からすでにそのような考えがあったのかはいうことはできない。
- 48) 『クララの明治日記』 講談社、1976、p.274、下p.30。クララたちをパーティに連れていってくるはずであったディクソン氏はイザベラのお供のためにクララとの約束を破った。その3日後の日記に「火曜日にアジア協会の会にお供をさせてほしい——バード老婦人が彼（ディクソン）をひったくらなければ——と言われた。」(p.31)と記している。
- 49) 文献22、p.4。
- 50) 文献7、pp.279-280。
- 51) 文献44、「明治9年の諸派伝道」,pp.46-48参照。
- 52) 文献7、p.359。
- 53) 長谷川誠一「二つの英人蝦夷旅行記 Thomas W・BlakistonとIsabella L・Bird」、『酪農学園大学紀要 第10巻、第2号』1984、pp.467-476。
- 54) トーマス・ブラキストン著（1883）、高倉新一郎校訂、近藤唯一訳『蝦夷地の中の日本』八木書店、1978、pp.343-344。
- 55) チェンバレン、高梨健吉訳『日本事物誌1』平凡社、1969、p.70「アイヌの叙述が特に価値がある」と記されている。
- 56) 文献36、p.12。
- 57) 文献36、p.66。この間の事情は『聖パウロ教会の歴史』（文献36）に詳しい。
- 58) 文献36、p.50。
- 59) イザベラの講話、講演、病院建設については、金坂の資料（文献15）に従ったので、参照されたい。
- 60) 『英国教会伝道協会の歴史』（文献34）の著者。
- 61) 文献10、p.270-271。
- 62) 文献10、p.271。
- 63) 文献10、p.304。
- 64) 文献10、p.304。
- 65) *Unbeaten Tracks in Japan I*.pp.387 -390. 文献8、pp.325-328。
- 66) *Unbeaten Tracks in Japan II* p.302. 楠家（2002）p.279。
- 67) 文献7 p.46-47。ここで3年と記されていることから、バーム、ファイソンの両氏はどちらも1875年に新潟に着任しており、両者を指すと考えた。この結果について、『英国教会伝道協会の歴史』（文献34）には「ファイソンも最初は東京に行ったが、後に東京より西の海岸にある新潟に移った。しかし結局ここは長続きしなかった。」(p.54)と記されている。